
ポケモン不思議のダンジョン アホな探検隊

黑夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン アホな探検隊

【Nコード】

N7703I

【作者名】

黒夜風

【あらすじ】

元人間であるポケモン・ピカチュウ。友達のヒコザルと共にギルドに入る。ある日、依頼解決の為にサフェルト海に向かう。そこでピカチュウ達とはとんでもない組織に関わる事になる。それは国際政府からの分離・独立を目指す連合軍だった。

登場人物 2010／6／8 更新（前書き）

はい、初のポケダン系の小説です

殆どオリジナルストーリーですので注意して下さい
後、キャラ崩壊とかにも（オイオイ

【ギルド】

◆いろいろな依頼を解決したりする組織

プクリン…ギルドの親方^{ボス}へ^{ボス}

ピカチュウ…実は元人間のポケモン。何故人間からポケモンになったのかは不明

ヒコザル…少々、せっかちな性格のポケモン。微妙に気が荒い

【連合軍】

◆国際政府に反発する組織で近年勢力を拡大している。
主な領土は南方と東方。

大暗黒帝…連合軍の最高権力者。闇をパワーを使用し、ポケモンすら敗北させる

ティワード…大暗黒帝の信任厚い人物であらゆる任務をこなす〈総督〉

コマンド…連合軍の前の姿「財閥連合」の総督だった人物〈副総督〉

グランドロイド…最新鋭の機械。元々は人間らしい〈七武王〉

ケイレイト…ブーメランを使用する人物〈七武王〉

×フアルア…感情に流されやすく大暗黒帝にも反発していた。

それが原因で大暗黒帝に捨てられ死亡した〈七武王〉

コモット…コマンドの側近で彼に信頼されている〈大幹部〉

ニンダー…連合軍内で大きな権力を持つ人物〈大幹部〉

バント…元々は財閥連合の幹部。コマンドと共に連合軍に加わった
〈大幹部〉

メタルメカ…全身を装甲で包みあらゆる武器を使用する〈将軍〉

ナード…職務中にゲームをする問題な将軍〈将軍〉

プロパネ…ティワードの命令を忠実に守る人物〈将軍〉

レンド…ティトシティの戦いの時にいた人物〈将軍〉

【国際政府】

◆世界をまとめる巨大政府。

クオット…1年半前、ティトシティを防衛していた〈将軍〉

スリ…サイエネットのメモリーカードを持っている筈の人物〈P
A R U M 副長官〉

登場人物 2010／6／8 更新（後書き）

×Ⅱ死亡

【第1章 依頼の解決】 第1話 ギルドへ

【とある森】

雨の降り注ぐ今日。

森を駆け抜ける一人の少年。

彼の名はグレン。

「ハアハア…… まだ追ってくる」

「降伏セヨ！ 降伏セヨ！」

彼を追うロボット兵。

その数、6体。

「ああッ！！」

走るのを止めた。

何故なら前は崖だからだ。

崖のした海が広がる。

「寄越セ！ 寄越スノダ！」

迫って来るドロイド（人間型ロボット）。

「嫌だ！　これは渡さない！！」

彼の手には袋が……。

ドロイド兵はその袋を狙っているらしい。

「絶対に渡さない！！」

「寄越セ……寄越セ寄越セ寄越セ」

「嫌だアアア……」

＊

「うわア！！」

跳ね起きたピカチュウ。
かなり息が荒い。

「どうしたんだア？　ピカチュウ」

一人のポケモンが入って来た。
彼はヒコザル。
ピカチュウの友達だ。

「またあの夢を見てしまったんだ……」

「ああ……アレか」

あの夢と聞いただけで分かったらしい。

「「一等の宝くじを銀行に持っていったら銀行員に燃やされた」ていう夢だろ」

「違うよ ヒコザル」

呆れたように言う。

スペシャル級にどうでもいい話だが「宝くじ焼き捨て」の夢はヒコザルが見た夢である。
全く変な夢だ。

「そう言えば今日はギルドに行く日だぜ」
「うん、分かっているよ」

このギルドは主に依頼を受けて解決する所であった。
二人はこのギルドに入る為に行くのだ。

【ギルド……厳密に言えばギルド前】

「さーて、早速依頼を……」

「違うから!!」

ギルドへと入ろうとする二人。
無事に入れるか!?

「無事に入れるだろ」

……そうですね

【第1章 依頼の解決】 第1話 ギルドへ（後書き）

ヒコザル「次回はギルドへ侵入か」

……え？ 違いますが……

ヒコザル「え？ ギルドを壊滅させる為に行くんじゃないのか？」

違いますよオオ！！

ピカチュウ（時々、怖い事を言うんだよなア……）

第2話 ギルドボス・プクリン

【ギルド 出入口】

「んじゃ、入るぞ」

ヒコザルが先にギルドに入る。
その途端、ギルド内からポケモンの声がした。

「ポケモンを発見！ 足跡はピポサル」

「違うわ!!」

（サル違いだ……）

ピポサル……あ、いや、ヒコザルの突っ込みが炸裂する。
しばらくの間、静まり返る。

「足跡は……ヒコザル？」

「聞くなァ!!」

何だかんだでヒコザルの足跡鑑定(?)は終わった。
次はピカチュウ（パトナー）の番である。

「足跡はゴリチュウ」

「誰だよ！　ゴリチュウって！！」

「知らん！　神と呼ばれないポケモンだろ！！」

「呼ばれないのかい！！」

ギルド内から声がする。

因みにゴリチュウは普通存在しないポケモンだと思われる。

「足跡は……多分ピカチュウ」

「多分かよ……　とにかく中に入って来い」

ギルド内より親方と思われる声がした。

二人は複雑な表情で入る。

（このギルド、大丈夫か！？）

【ギルド内】

「よく来た」

親方らしきポケモンが二人に言う。

このポケモンはプクリン。

「俺がギルドのボス　プクリンだ」

「俺は時期ギルドボス　ペラッパ」

勝手に時期ギルドボスと名乗るペラップ。
そして、現在のB O S S……プクリン。

「僕はピカチュウです」

「俺はヒコザル 宜しく」

二人共に自己紹介を終えた。
プクリンは二人をギルドを案内する。

【トイレ】

「此処がトイレだ 一般の客専用だ」

【トイレ】

「此処はボスの黄金トイレだ」

【トイレ】

「此処はお前ら新入りのトイレだ」

【トイレ】

「此処は普通トイレだ」

【トイレ】

「此処は……壊れたトイレだ 使用不可」

【ボス部屋】

ギルド探検を終えボス部屋に戻った二人。

「どうだ？ ギルドは楽しそうだろ」
（トイレしか、見てねえよ!!）

ヒコザルが心の中で突っ込んだ。

【チーム ペーパーの部屋】

チームペーパー……ヒコザルとピカチュウのチーム名である。
チーム名は勝手にプクリンが決めたらしい。

「ネーミングセンスねえな アイツ（プクリン）」
「確かにね……」

沈んだ気持ち。

結局今日は半日の間トイレを見せられ精神的に疲れた。
クタクタであった。

（このギルド、大丈夫かな……）

ピカチュウは寝ながらそう思った。

第2話 ギルドボス・プクリン（後書き）

次回はいいよミッションです

ヒコザル「ミッションは大丈夫か」

ピカチュウ「トイレ掃除じゃないよね」

第3話 依頼掲示板(前書き)

今回はギャグはほぼナシです(何

第3話 依頼掲示板

【ボス部屋】

「よォし お前らに早速ミッションを与える!!」

親方のプクリンが言う。

あ、ギルドボスカ（黙

「今日のミッションは掲示板の悩み事を2つ解決しろ! 以上」

「分かりました」

「任せとけ」

二人は張り切ってボス部屋から出て行く。

向かう先は勿論、依頼掲示板である。

【ギルド内 依頼掲示板】

この掲示板には依頼や、悩み事が書かれていた。

掲示板の前に立つ二人。

ピカチュウとヒコザルである。

「コレが掲示板かァ……」

「さて、一番簡単な奴はどれだ?」

そう言って掲示板を見るヒコザル。

〈掲示板内容〉

- ・裁判員に選ばれた!! b yキルリア
- ・テストの点が…… b yアメタマ
- ・大ポケ祭のボランティア募集 b y大ポケ祭実行委
- ・バトルしよーぜ b yゴルバット
- ・世界ハ滅ブ b y匿名
- ・指輪を落とした! b yルナトーン
- ・崇メヨ! 神ヲ! b y匿名
- ・やべえ b yサメハダー
- ・スピード勝負だ b yムクホーク
- ・届け物 b yジバコイル
- ・良質な飯を買ってきて! b yハガネール
- ・稲刈りを手伝って下され b yヌケニン
- ・キレイハナに進化したい b yクサイハナ
- ・歌を聞いて b yゴニョゴニョ
- ・絵の審査を頼む b yドール
- ・サンゴをとって来て b yサニーゴ

「なんか、変なモンばっかだなア」

「と、とにかく選ぼうか……」

複雑な表情で依頼を選ぶ。

選んだ依頼は下記の2つ。

- ・やべえ……親友のキバニアが奇妙な奴らに捕まっちゃった。俺の

力ではどうにもならねえ。誰か、アイツを助けてやってくれ。お礼はすると思う。

・指輪を落とした！……彼のソルロックから貫った指輪を落としてしまったわ。誰か探してー！ー！！

「んじゃ、早速行ってくるか！」

「うん！ そうだね」

二人は2つの依頼を選び、その依頼を解決するためにギルドを飛び出したのであった。

第3話 依頼掲示板（後書き）

次回から依頼スタートです！

第4話 ルナトーン宅にて

ギルドを飛び出した二人。

まずルナトーンの依頼を解決する為にルナトーンの家に向かった。

【ルナトーン宅】

ルナトーン宅に到着した二人。

早速、チャイムを鳴らす。

「おじゃまするぞ」

チャイムを鳴らすと同時に家に突入しようとするヒコザル。
思いつきり、不法侵入。

「早い！ 早いから！！」

慌てて、止めるピカチュウ。

「え？ 早い？ そうか？」

「そうだよ！」

「どちらさまア？」

月が家から出て来た。
厳密に言えばルナトーンだが。

「デメエが依頼者n」

「あ、貴女がルナトーンさんですね」

ヒコザルの口を塞ぎながら言うピカチュウ。
ヒコザルは「何をするんだコノヤロウ」という顔をピカチュウに向ける。

「依頼を聞きに来たピカチュウです！」

「アラア、ホント？ 助かるわア」

早速、家に二人を入れるルナトーン。
そこで依頼の内容を話す。

「無くした場所はどこですか？」

「真暗森ですわ」

「いつ頃、無くしたのですか？」

「3日前よ」

「一緒だった野郎は誰だ？」

「友達のマッスグマ」

「他に誰か居たか？」

「居ませんでした」

「新しく公開される「2024」の映画について意見は？」
「怖いと思うわ」

「今度発売される「new! スーパーニャリオブラザーズ Mi
i」の購入予定は？」

「買いますよね」

「ニャゴヤ城と小阪城 どちらがお好みだ？」

「お好み焼きが好きです」

ピカチュウは思った。

（関係ねえ質問ばっかしてんじゃねえよ！ クソザル！！（怒））

結局、ルナトーン宅を出る頃には夜だった。

【真暗森】

到着した二人。

森への入り口は真っ暗な穴だった。

第5話 何かの肉は特価97円! (前書き)

ヒコザル「何かの肉？」

ピカチュウ「何ですか？
それは？」

お楽しみでゴザる（誰

第5話 何かの肉は特価97円!

【真暗森】

名前通り真っ暗で、それ程暗くない森なのである（意味不
ルナトーンは此処で指輪を無くしたと言う。

「ホント暗い森だなア」

「暗いだけでガラクタに過ぎん」

（ええええー！！?）

ヒコザルの爆弾発言に内心驚くピカチュウ。
二人は森に入ってしまった。

「なんか来たぞオ……」

「冒険家か……?」

「押し売りか? 警察よぶぞ」

「怖い森にようこそ……」

「堕ちたポケモンか……?」

「映画館の亡霊かア?」

「あら、お肉が安いわア」

「いらっしゃーい♪ うふー♪♪」

辺りからヒソヒソと声がしている。
亡霊達の怨念か!?

それとも、人をあの世に送る歌か!?!
もしかして、地獄からの合唱なのか!?!

「これは、明らかに……」

「うん……」

ピカチュウとヒコザルは振り向いて言う。

「「ポケモン達の、イタ怨ズ念うだ!?!」」

そう言った直後に顔を見合わせる。

「ピカチュウ、何て言った?」

「え? ポケモン達の、イタズラだ!?!」
「って言ったけど?」

「イヤイヤ、コレは怨念だろ」

「んな訳あるかァァ!?!」

ピカチュウは鋭くヒコザルに突っ込んだ。
しかし、ヒコザルも反論する。

「じゃあ、あれ見ろよ!?!」

「お肉安すぎ!」

そう言っているポケモンを見る。
そのポケモンは手に黒い袋を持っている。

「あ、あれは……!!」

「何かの肉 特価97円」

（何だよ アレは!!）

ピカチュウが思った。

しばらくすると、そのポケモンは袋から「何かの肉」を取り出す。

「あらヤダー! 何かの肉って指輪じゃない」

「「何イイイ!!」」

黒い袋から指輪（と言ってもプラスチックのオモチャだが）を取り出す。

目的の指輪を……。

果たして、どうなるのか？

第6話 依頼完了

指輪を持っていたのは森に住むポケモンであった。

「マズいですね」

「え？ 何の料理の事？」

「違う！！」

何がマズかったのかはさておき（黙
二人は交渉で指輪を貰う事にした。

「あの、スミマセン」

「アラ、あなた達はだれです？」

「僕はピカチュウといひます」

「俺はヒコザルだ」

自己紹介を終えた二人。

早速、交渉を始めた。

「あのその指輪なんですけど……」

「落とした方がいるんで返してくれねエか？」

「えー いいよ」

こうして指輪を無事ゲット！

（何イイイイイ！！！！）

「あの、ホントにいいんですか？」

「実は私「指輪恐怖症」でしてね……」

「はい？」

「と、申しますと？」

指輪恐怖症について疑問を抱く二人。

まア、当たり前か。

「指輪に付いている宝石は大丈夫なのですが……」

「は、はア」

「それが、指輪になると背筋が凍りついてしまって……」

呆れた表情をする二人。

ヒコザルが言った。

「帰っていいですか？」

＊

森を出た二人は直ぐに、ルナトーンの家に向かった。
勿論、報酬をもら……

指輪を渡しにである（オイ

「確かにこの指輪だわ」

指輪を受け取り喜ぶルナトーン。

「ではコレがお礼ね」

「待ってましたァー!!」

そう言って報酬を渡すルナトーン。

二人はルナトーンの家を後にし、ギルドへ向かった。

第7話 謎の夢

【ギルド ボス部屋】

ボス部屋という名のプクリンの部屋（何この部屋に多くのポケモンが集まっていた。

「今日、集まって貰ったのは実は近い内に帝龍宝ドラゴントレジャーという物を探す探検に行く事になった！！」

「「オオ」」

帝龍宝ドラゴントレジャーとはこの地方に伝わる伝説の秘宝で、どのような物かも知られていない。

一説には持つ者はこの世界を支配する事が出来ると言われていた。

「へえ、そんな物を探すんだ」

「本当にあるのか随分怪しいな」

半信半疑で話を聞いていたヒコザルが言う。

ヒコザルは帝龍宝ドラゴントレジャーの伝説は信じていない派だった。

「でも、興味があるよね」

「そお？ 俺は宝くじの方が興味あるケドな」

ヒコザルの最近ハマっていること…宝くじ
前回、依頼をクリアして報酬を貰ったが、その報酬は、ほとんど
宝くじに消えたという。

「さて、出発は3日後だ それまでに準備をしておくように！ 以
上、解散！！」

【チーム・ペーパーの部屋】

忘れられたかも知れないがヒコザル・ピカチュウのチーム名はペ
ーパーである。

^{ペーパー}
紙のように薄い（経験の話）かららしい。

さて、2人は既に床につき、寝ていた。

ピカチュウは不思議な夢を見た。

「お前は、東に行き、強く強大な敵に出会う」

「お前は、宝を見つけるがそれはお前にとって災いとなるであろう」

「災い？ どういうこと？」

「さらばだ……」

謎の声は消えていった。

そこでピカチュウは目を覚ます。

（今のは……？）

【第2章 連合軍現る】 第8話 キバニアとサメハダー

【サフエルト海】

サフエルト海はギルドのある街から南方にある。

この海は大きな海で、多くの水ポケモン等が泳いでいる。

この海の海岸にいる3匹ポケモン達。

イエーイ！

海水浴だ〜！

スイカ割りやろーぜ！

という雰囲気ではない（

「それは今から10日ほど前の事だ」

「10日前？」

随分、最近だなア

自分で探しに行ったらどうだ？」

「スイマセン 続けて下さい」

そのポケモン……キバニアは再び説明を始める。

「海で泳いでいたら……」

「10日前」

海で泳ぐ2匹のポケモン。

1匹は説明していたあのキバナア。
もう1匹はキバナアの親友であるサメハダー。

「なア、その沈没船にはどれくらいの宝があった？」

「焦るなキバナア

質は悪い宝石だがかなりあった」

「質より量だ！ 急ぐぜ！」

キバナアはスピードをあげ沈没船に向かう。
サメハダーも後に続く。

【沈没船】

沈没船の至る所から海藻が生えており、沈没したのは昔だと思われる。

早速、沈没船に入る2匹。

「宝が……ない!!？」

「はア!!？ オイ！ どうなってんだ？」

宝があった場所には何も無く、ポツカリと空間ができている。
辺りには海藻がフラフラと生えているだけ。

「うん？ オイ！ アレを！」

一隻の巨大な船。

今、まさに動きだそうとしていた。

「ま、まさか あの船の連中が宝を横取りしたのでは？」

「何だと！」

海に落ちたモンは俺達のモンだ！

陸の人間やポケモンが勝手にとってんじゃねえ！！」

そう言うときサメハダーはその船に突進していった。

【船 レーダー質】

船のレーダーが突進してくるサメハダーをとらえる。

「ティワード総督ニ申シ上げマス」

「どうした？」

「1匹のサメハダー、軍艦ニ突進シテ参リマス」

「ほう……」

「ドウイタシマショウカ？」

ティワード総督は考える。

忘れてたがティワード総督は人間でとある組織に仕えている。

「ナード將軍 プロパネ將軍」

「何でしょう（何で俺に……）」

「はっ」

「軍艦に体当たりしているサメハダーを捕らえよ！」

「は、はい（オイオイ、何故、そんな簡単な任務を……）」

「!??? わ、わかりました」

2人とも納得のいかぬ顔で向かった。

何故、こんな簡単な任務なのかという顔で……。

【第2章 連合軍現る】 第8話 キバニアとサメハダー（後書き）

ヒコザル「回想長くね？ もっと短くしようぜ？」

キバニア「何だと!？」

まあまあ、落ち着いて（汗

第9話 トラップ魚雷

「宝を返せコノヤロウ!!」

未だに軍艦に突進するサメハダー。
後ろからキバニアがやって来た。

「なァ、もう宝は諦めようぜ」

「な、何ィ！」

あの宝を最初に見つけたのはこの俺だぞ！

それを陸のポケモンに奪われて悔しくないのかよ!!」

「……この船、本当にポケモンが造ったモンか？」

しばらく沈黙が続く。

サメハダーが先に口を開く。

「じゃあ、この船には誰が乗ってんだ？」

「ポケモンではこんな巨大な船は造れない」

確かに不可能だろう。

なにしろ、この船はホエルオーやカイオーガよりも大きい。

「だとしたら、人間しか居ないだろう」

「人間……
だったら余計に諦めれん」
「えッ!!?」

キバニアはギョツとした顔でサメハダーを見る。

「お前も知っているだろ
俺の……」

【軍艦】

軍艦ではサメハダーを捕まえる準備が進んでいた。
その準備はほぼ完了。
後は捕まえるのみ。

「プロパネ將軍ニ申シ上ゲマス
トラップ魚雷、準備完了シマシタ」

このトラップ魚雷にはモンスターボール、ネットボール、ダイブ
ボールが詰められていた。

この魚雷に少しでも触れればトラップが発動。

魚雷は爆発し、中の物が辺りに飛び出しポケモンを捕まえる。

「トラップ魚雷、打てェ!!」

「了解シマシタ

トラップ魚雷、全弾発射セヨ」

【水中】

一方、こちらは水中。

未だに問答を続ける2匹。

「じゃ、こういうのはどうだ？

この軍艦に穴を開け……」

「それも無理だろ

もう宝は諦めて……」

その時、ガコンツと音がした。

「今の音……

何だ？」

「ま、まさか、バレれたのでは？」

その通りバレていた。

だが気づくのが遅すぎた。

既にトラップ魚雷は放たれている。

そして、それは凄い勢いで迫っていた！！

第10話 捕まったサメハダー（前書き）

遂に10話突破です！

ヒコザル「ようやくかよ!!」

第10話 捕まったサメハダー

水を裂き、2匹に近づきつつあるあトラップ魚雷。

その中に詰められている運命のボール。

それは海を荒し続ける2匹に与えられたとうぜんの試練なのかもしれない。

「オイ！ あれを！！」

「あア？」

たかが人間の造ったモノ……

ぶっ壊してくれる！！」

そう言うなり、魚雷に突進していく。

たがそれこそプロパネ將軍の狙いだった。

「トラップ魚雷まで後、500メートルといったところか」

そこで、プロパネ將軍はナード將軍の方を見る。

職務中にも関わらずゲームをしている。

「オイ！ ナード！！」

「ん？ 何かね？ プロパネ將軍」

「貴様、何をしている！！」

「見たとおり、ゲームだ」

ポケットモンスター・ハートゴールドだよ」

「ほほう、ハートゴールドか」

「そう、ソウルシルバーはオールクリアしたのでな」

「ソウルシルバーも職務中にやったのか？」

「勿論」

「今日から1ヶ月、休暇なしだ」

「……えッ！！？」

ようやく、ゲームから目を離す。

そして、そこにいたのはプロパネ將軍ではなく、ティワード総督だった。

どうやら途中からプロパネ將軍ではなく、

ティワード総督がプロパネ將軍の声でしゃべっていたらしい。

因みに入れ替わったのは「ほほう、ハートゴールドか」かららしい。

【水中】

散らばるモンスターボール。

サメハダーは捕まってはもがいて飛び出す。

しかし、何度も何度も、それを繰り返すうちに疲れが出てきた。

「ハア、ハア……」

クソッ！

人間をあなどったか……」

サメハダーにはもう体力の限界がきていた。
そして遂に……

「サメハダー！！！！」

サメハダーは1つのネットボールに消えていった。
そのボールの辺りには粉々になったモンスターボールとまだ使える
モンスターボール。
ごちゃ混ぜになって漂っていた。

第11話 命令

「話は現在に戻る」

【サフェルト海 海岸】

「な、なるホド

そいつはやべえな」

こう言うのはヒコザル。

あのギルドのヒコザルだ。

「でも、そいつらの居場所はどこなんですか？」

ピカチュウが言う。

この人物もギルドの一員だ。

「それは俺にもわかんねえ」

「わかんないだど〜！」

なんの手がかりもないじゃないか〜！」

「まあまあ、ここは軍艦が停泊しそうな所を聞くしかないよ」

ピカチュウが最善と思われる策を言う。

「……それしかないな」

「俺も同行して手伝うぜ」

「よし、早速街に向かおう」

チーム・ペーパー（ヒコザル・ピカチュウチームの事）はキバニアと共に街に向かった。

まずは情報収集。

そして、謎の軍艦の停泊場所を探す。

【とある島】

この島の港にはサメハダーを攫った軍艦が停泊していた。
此処こそ、ティワード総督らの基地であった。

「申し上げます

例のサメハダーは野生のサメハダーである事を確認しました」

「そうか、野生のサメハダーだったか」

「しかし、何故、サメハダーをトラップ魚雷を使ってまで捕らえたのでしょうか？」

「………考えがあつての事だ

もう下がれ

クワット中将」

クワット中将は黙礼して部屋から出て行く。

ティワード総督は書類に目を移す。

（奴はどこへ……

この地方に居るのはわかっている

なのにまだ探し出せぬとは……

どこにいるんだ

人間からポケモンになった奴は！！）

とある組織のティワード総督。

彼はとある人物から命令を受けていた。

とある人物の持つ「例の物」を探し出せ。

持っていた人物は殺せ。

そして、それをヨに献上せよ。

人間からポケモンになった人物……

それはチーム・ペーパーのピカチュウの事だった。

第12話 情報を収集せよ!

【サフェルトタウン】

情報収集の為、ピカチュウ・ヒコザル・キバニアはサフェルトタウンに来ていた。

サフェルトタウンはサフェルト海に隣接する港町だ。

「ずいぶん、でけエ街だな……」

これならすぐに謎の連中も判明しそうだな」

「じゃあ、早速情報収集を始めようぜ……」

3人はバラバラに散り、情報収集を開始する。
果たして、情報は集まるのか!?

「情報収集人・ピカチュウ」

まずは、ショップの店員に聞く。

「さア……」

ところで何を買うんです?」

次に市民。

「聞いたことないな……」

「そんな、やつらいるんかね？」

「軍艦は見ないなあ」

【サフェルト海上警備隊 支部】

「他をあたってくれ」

「ちよつと不真面目情報収集人・ヒコザル」

【工場】

「さアな」

「知らんよ」

【屋台】

「計200円になりまーす♪」

「いやあ、うまいうまい」

→ヒコザル

「恐怖の情報収集人・キバニア」

「軍艦を見たかって聞いてエんだよー!!」

「ひーッ！」

「し、知りません」

「知っておる」

「うわわわ……」

お、お助けを」

「ったく、誰も知らないのかよ……」

……………えッ!!?」

その人、知ってるのか!?」

【元の場所】

ピカチュウとヒコザルも戻ってきた。
キバナは既にいる。

「どうだった?」

「いやア、おいしかった」

「遠洋漁業をやってる奴から情報を得たぞ」

「ホオ、マジか!!」

「で、内容はどんなのです?」

キバナは聞いた情報を言い始める。
それによるとこういう内容だった。

10日前、軍艦を海で見た。
長い時間、同じ場合に止まっている。
しかし、夕方になると、南東の方角に走り去った。

「奴らのいった先は南東か……」
「よし!」

「すぐに追いかけてようぜ！」

「まず、船を用意しないと……」

ピカチュウが言う。

確かに此処は大陸の南端。

これより南下するには船がいる。

「なアに任せとけ！」

キバナアが言った。

「「えッ!!?」」

第12話 情報を収集せよ! (後書き)

感想とか評価とか送ってくれたら嬉しいです

「任せとけて……?」

「オイオイ」

「船持ってんのか?」

「アレを見ろ」

川に筏^{いかだ}が一隻。

しかも、所々さび付いている。

「アレで行くのか!？」

「アレで!？」

「大丈夫だ俺が引いていつてやる」

「じゃあ、軍艦に出会ったら?」

キバニアは水中に潜る。

そして、ロケットランチャーを持ってきた。

「8回撃ち込む事が出来るぜ」

「8回!?!？」

「8回でどうにかなるのか!？」

「まず、司令室に向かうのに5発

司令室をぶっ壊すのに1発

壁に穴を開けるの1発

予備に1発だ」

キバニアは涼しい顔でロケットランチャーを渡す。
暗い顔で筏にのる2匹。
そんな空気の中、筏は出発した。

【サフェルト海】

「なア、ヒコザルは何故、ギルドに入ったんだ？」
「……とある組織を潰す為」
「え！！？」

空気が更に重苦しくなる。

「そ、その組織とは？」
「世界を混乱させている連合軍だ」
「ええッ！！！」
「連合軍は俺の家族を殺した」

「1年ほどさかのぼる」

【ティトシティ】

その頃、ヒコザルはティトシティに住んでいた。
既に「国際政府」と連合軍との関係は最悪の状態となっていた。

国際政府とは世界中の国々をまとめる巨大国家。
連合軍とは国際政府からの分離を目的とした組織だ。

この二大勢力の間で戦争はいつ起きてもおかしくない状態だった。

【ティト城】

「パナート・クオット將軍

連合軍は我らの都市に大軍を差し向けたそうです」

パナート・クオット將軍の部下ノゾル中將が言う。

「……そうか

とうとう戦争を起こすのか……

残念な事になった

ノゾル中將 レンポー中將

ローン中將 ドロン中將」

4人の中將を呼ぶ。

このティト城には5人の中將と1人の將軍によって守られていた。

「すぐに軍を防衛に向けろ

フーソ中將は首都・グリードシティに連絡を入れろ」

「はっ」

直ちに戦闘の準備を開始する。
その翌日だった。
連合軍が攻め込んだのは……。

第13話 ヒコザルの過去 1／4 (後書き)

感想・評価などあったらお願いします！

第14話 ヒコザルの過去 2／4

鳴り響く警報。

連合軍はティトシティに爆弾を投下し始めた。

崩れる落ちてゆく建物。

それは長年守られてきた平和が崩れていくのを暗示しているようであった。

【ティト城】

「指揮官はあいつか……」

敵の総帥はクォット將軍のよく知っている人物だった。

それだけにその人物の恐ろしさもよく知っている。

「申し上げます！ 敵軍は東西南北の四方から攻めてきます！ 各方面の兵力は5万体制 至急援軍を要せ」

ここで連絡が途絶える。

それを聞いていた兵士達は顔を見合わせる。

どの兵士も深刻そうな顔をしていた。

【ティトシティ】

逃げ惑う人々。

戦おうとする政府の兵士。

その人々を無差別に撃ち殺す連合軍のバトルドロイド軍団。

「侵略セヨ！ 破壊セヨ！」

「助けてくれー！！！」

「第12軍、MTOエリアへ！ 連合軍は既に侵入している！」

「破壊セヨ！ 侵略セヨ！」

「殺されるよー！」

40万體という大軍の連合軍。

一方、政府軍は15万人。

数では圧倒的に連合軍が多い。

だが、政府軍は実力でも負けていた。

まず、兵器の威力。

連合軍は高性能なミサイルやレーザー砲などの兵器が優れていた。

次は指揮官の実力。

政府軍の指揮官はクオット将軍で実力・名声を共に備えている名将。

だが連合軍の総帥にはどちらも及ばなかった。

「将軍、至急退避を！ 連合軍が城内に入ってくるのも時間の問題です」

「そうか…… 中将達の軍では守り切れなかったのだな」

「残念ながら」

【ヒコザルの住む家】

ここは約1年と半年前までヒコザルが住んでいた家。

この家の近くにも連合軍は迫っていた。

この時ヒコザルは家から離れたティト城内の周辺に居た。
その為、この家には居ない。

「リーダー・コマンイム コノ先ハ住宅街デス」

「全テ破壊セヨトノ御命令ガ下ッテイル 攻撃ヲ開始セヨ」
「了解シマシタ」

たちまち、砲撃に次ぐ砲撃の嵐が始まる。

住宅街は絶叫と悲鳴の渦。

血は河となり死体は山となる。

「うわァ！」

「連合軍の攻撃だ！」

「軍は何をやっているんだ!!」

「助けて！」

逃げ惑う群集。

それをゴミのように吹き飛ばす攻撃。

ティトシティは絶叫と悲鳴の殺戮地獄と化していった。

第15話 ヒコザルの過去 3／4

立ち上る黒い煙。

それはティト城からも見える。

ヒコザルやクオット将軍も見ていた。

「な、なんという非道な……」

クオット将軍が顔をしかめて言う。

その目は立ち上る黒い煙の方角を見ていた。

「父さーん！ 母さーん！」

突然、誰かが叫んだ。

それと同時に、走り出す声の主。

ポケモンのヒコザルだった。

はっと、我に返るクオット将軍。

慌ててヒコザルの後を追う。

「キミ！ 待ちなさい！ 行ってはダメだ！！」

クオット将軍はすぐに追いつきヒコザルの腕をつかむ。

ヒコザルはジタバタと抵抗する。

「な、何をすんだよ!!」

「ダメだ! 行くな!」

「だっで…… 父さんと母さんが……」

半泣きになりながら言うヒコザル。

「分かっている…… だが、もう間に合わん」

「何でお前が決めつけるんだよ! 勝手な事……言うんじゃ……ねえよ……」

そこまで言うのと号泣し始める。

ヒコザルにも分かった。

家族が生きている望みは薄い事が……

「クオット將軍! は、早く! 連合軍はもうすぐ近くまで迫っています!!」

一人の兵士が叫ぶ。

いつの間にか天を焦がすような紅い火でシティー帯をおおっていた。

グズグズしているとドロイド兵に殺されるよりも火に焼かれてしまっそうだ。

「よし！ お前たちは先に撤退しろ！」
「はっ！」

一斉に撤退を始める軍。
その中には大勢の市民も混じっていた。

「さ、行こうか」
「……………」

クオット將軍が声をかける。
ヒコザルは住宅街の方を見たまま動かない。
絶対に諦められない。
クオット將軍は少しの間、考えていたが決断したように顔を上げた。

「フーソ中将！ フーソ中将！！」

群集に向かって声をかける。
すると一人の男がやって来た。
この人物がフーソ中将だ。

「何でしょう？」

「お前は群集を率いて無事に国際政府の管轄地域に連れていけ」

「はっ！　ところで將軍はどちらへ？」

「CQKエリア……つまり住宅街の方に行く　その住民を救出しに行く」

ヒコザルははっと顔を上げる。

「住宅街って俺の住んでるとこか！？」

「そうだ　お前の護衛と住民救出をする」

ヒコザルの表情が明るくなる。

「では、將軍、先に避難します　お氣をつけて……」

「うむ　さて、我らも行くぞ」

「は、はい」

クオット將軍とヒコザルはいざ住宅街へ……

目的は住民救出とヒコザルの家族を探しに……

だが、住宅街には連合軍の軍勢が侵入していた。

第16話 ヒコザルの過去 4／4 (前書き)

今回はギャグ多いかも(何

【住宅街】

ここは連合軍の大軍で埋め尽くされていた。
逃げ回る人々。

無差別に攻撃するドロイド兵。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「ア！ 才前ハ……」

「どけ！ “回転斬り”！！」

次々とドロイド兵を破壊するクオット將軍。
その後に続くヒコザル。

「レンド將軍、敵将クオット 侵入シテキマシタ」

「何ィ〜？」

クオット？

“スペシャル・ポケモンマスター”（自称）のレンド様にィ〜

ま・か・せ・ろ♪

それ！ 行けェ〜！

メタグロス！ ジバコイル！」

連合軍のレンド將軍はメタグロスとジバコイルを召喚。
対するクオット將軍はクロバットとサーナイトを召喚する。

「H A H A ☆♪

ジバコイルウ〜♪ 十万ボルトだY O ★
メタグロスはサイコネシスでG O !」

レンド將軍の命令で一斉に攻撃を開始した二匹。
クオット將軍もまた命令を出す。

「クロバット、“空を飛ぶ”で回避」

「サーナイトはテレポートで一時的に回避!!」

この命令で攻撃を回避する。

「ムダで〜ある! 回避だけじゃダメじゃない!

H A H A H A ♪ ポケモンバトルは苦手かい? M r. クオット」

「黙れ! “クロスポイズン”でドロイド兵を蹴散らせ!」

「おう! 任せろ! “クロスポイズン”!!」

クロバットは空中からクロスポイズンでバトルドロイドを攻撃する。
雨のごとく降り注ぐ毒。

それを見たレンド將軍はニヤリと笑う。

「ヘイ！ いやァ！超乙だYO♪ 乙過ぎるぜ☆
バトルドロイドは残念ながら鋼タイプだい！
毒タイプの攻撃はむ・こ・う☆★☆☆★」

「な、何ッ！！？」

クオット將軍……

軍の指揮力・自己の実力は高かった。

「さァ！ さァ！！ さァ！！！」

お間抜け將軍クオットの公開処刑タ〜イム！

“ 十万ボルト ” とオ “ コメットパンチ ” でやっつけろォ！！」

だが、ポケモンバトルの実力は低く、
レンド將軍には遠く及ばなかった。

「クオット將軍さんもここで終わりですネ」 “ 十万ボルト ”
「あの世でポケモンバトルを研究するんだな！！」 “ コメットパンチ ”

二匹は一斉に攻撃……

クオット將軍は空中に吹き飛ばされる。

そして、地面に叩き付けられた。

「さァ！ ヒコザルとサーナイトを探し出せ！

“ ウルトラ・ポケモンマスター ” のレンド様がァ！ 消すぜイ♪」

「了解シマシタ レンド將軍」

バトルドロイド達は戦闘開始前に別れたヒコザル。
戦闘中に離脱したサーナイトを探しに動き始めた。

第17話 お前ら……！

走るヒコザルとサーナイト。

実はサーナイトはクオット將軍からヒコザルを守れ！
そう言われていたのだ。

「クオット將軍は大丈夫なのか！！？」

「分からないわ クオットさんはポケモンバトルあまりしないから」

超ビックリな事を聞いたヒコザル。
ますます不安がつる。

「ええ！！？ それってマズいじゃん！！」

少し進むとバトルドロイド達がいた。

「ア！ 敵だ！ 殺せ！」

「“サイコキネシス”！！」

サイコキネシスでバトルドロイドを破壊していく。
だが、キリがない。

後から後からウジ虫のごとくわいてくる。

「アナタの家は？」

「ア、アレだ あの高い色の家だ」

白い家。

そこはヒコザル達が暮らしている家だ。

「父さん！ 母さん！！」

先に家に入るヒコザル。

壊された玄関の扉。

窓ガラスが割れている。

嫌な予感がする。

「……………！！！」

そこで信じられない、いや、信じたくない光景が目に入る。

4体のバトルドロイド。

殺された2匹のポケモン。

それは自分の父と母だった。

「新タナ敵ヲ発見」

「お前ら……………！」

全身の血液が沸騰しているかのような気がする。
凄まじい怒りが胸から湧き上がって来た。

「死ねエエ!!
“ 火炎放射”」

真っ赤に染まった炎を吐き出す。
そして、バトルドロイドを家の外に吹き飛ばす。
4体共、全て。

「ハア……ハア……」

まだ収まらない怒り。
凄まじい怒り。
血が出るほど唇を噛む。

「行こう……」

家から出て来た彼は言った。
サーナイトは後に続く。
クオット將軍のクロバットが飛んで来た。

「クロバット! クオットさんは……?」

「……………」

黙り込むクロバット。

その瞬間、最悪のシナリオを考えてしまった。

彼が死んだ……？

＊

【トレジャーシティ】

あのティトシティの戦いから1年後、ヒコザルはこの地で生活していた。

連合軍と国際政府の間で勃発した戦争はまだ続いていた。

しかも、その戦線は世界各地に広がっていた。

戦争はいつになったら終結するのか？

それは誰にも分からなかった……

第17話 お前ら……！（後書き）

あ、言い忘れてたけど、過去話は今回で終わりです
次回から現在に戻りますよ

第18話 全然怪しくないボタン（前書き）

全然怪しくないボタンは押すべし！

第18話 全然怪しくないボタン

【サフェルト海】

進む一隻の筏。

その先には大きな基地があった。

「うわッ！ でっけえな」

「ここに軍艦があるんですね」

「アレだ！ サメハダーを攫った軍艦は！！」

基地の周囲にはあの巨大軍艦が10隻も並べられていた。
軍艦の艦隊は筏には気づいていないらしく止まっている。

「あの、10隻もありますけど……」

「予想外だわ こんなに軍艦があるとは」

キバニアにとって軍艦10隻は意外だったらしい。
勿論、バズーカでなんとかなる訳ない。
万事休す……かも。

【組織？？？ 第3基地】

実は基地内部の兵士達は気づいていた。
彼らの筏が来ていた事に。

「普通の船1隻で十分だろ 奴らを捕らえろ ルンド准将」

命じているのはプロパネ將軍。
サメハダーを攫った時にもいた將軍だ。

「了解しました」

ルンド准将は兵を率いて向かった。
一方、筏のポケモン達はまだ気づいていない。

「どうやって中に入ります？」
「勿論、正門から堂々と入るのが……」

しかし、正門の扉はしっかりと閉じられている。
開く気配すら無い。

「どうやって、扉を開けます？」
「焼き払う」
「もし、衛兵がいたら？」
「焼き払う」

「凄く強い敵がいたら？」

「焼き払う」

「100万円が落ちてました」

「焼き…… ゲットする ってオイ!!」

解決策の浮かばず時間ばかり過ぎていった。

もう、夕方になっている。

しばらくして、キバニアがとある物を見つけた。

「なァ、扉の横にボタンがあるぜ」

「お！ 開門ボタンだろ」

「そうとは限らないケド 近くで見てもみましょう」

早速、筏を進め、近くで見してみる。

ボタンの横に文字がある。

『いらっしやいませ』

遠い所お越し下さって有難う御座います

さて、中に入るにはこの“全然怪しくないボタン”を押して下さい
さい

決してこれは罠なんかじゃ有りません

さァ、早く押して下さい』

「コレは…… 罠でしょう」

「すぐに助けるぞ〜！ サメハダ〜!!」

「んじゃァ、すぐ行こうぜ！」

「え!!!？」

遅かった。

気づいた時には“全然怪しくないボタン”を押した後だった。
コレは勿論罠。

押した途端、床が開き、落ちて行つた。

「「ギヤアアアア……!!」」

第18話 全然怪しくないボタン（後書き）

全然怪しくないボタンは押すべし！
あえて危険に飛び込む勇気を！

第19話 機械ポケモン

【第3基地 地下3階】

罠に掛かって地下3階に落ちたどっかの探検隊。
本当に探検隊なのか疑いたくなる。

「イテテ…… ずいぶん、落ちたなア」

「ケッ 罠なんか作りやがって」

とある組織の基地の地下。

奥へと道が続いている。

薄暗いが明かりがあるため、楽に進む事が出来そうだ。

「さて、進みましょうか！」

不機嫌そうに言うピカチュウ。

1人で進み始める。

この後を慌てて追う2人。

【第3基地 地下3階 階段前】

3人は立ち止まった。

そこには、謎の生物が2匹いた。

「な、何だ!?　　ありゃ?」

「だぶん、ドガスとベトベターじゃないかと……」

そこにいたのはドガスとベトベター。

だが、どこかおかしい。

色は青色をしている

それに、所々機械のような物までくつついている。

更に、目は鉄網で覆われていた。

「ピピッ!　侵入者ヲ発見　攻撃ヲ開始シマス」

「ドロイド・ベトベター同ジク」

動き始めた2匹。

声も機械の出す声ようであった。

「ロボットか?　それともポケモンか?」

「攻撃セヨ!　破壊セヨ!」

「攻撃セヨ!　破壊セヨ!」

距離を一気に縮める謎のポケモン。

仕方なく、探検隊側も攻撃をする事にした。

「必殺！ “十万ボルト”！」
“ヘドロ爆弾”」

ピカチュウが十万ボルトを。

ベトベターがヘドロ爆弾で攻撃する。

ピカチュウはヘドロ爆弾を回避。

一方、ベトベターは十万ボルトを喰らっていた。

「…………… “破壊光線”」

少しの間止まっていたが再び動き始める。

しかも、破壊光線を打って来た。

慌てて避けるピカチュウ。

「破壊光線！！？」

“破壊光線”」

再び破壊光線を打ったベトベター。

本来は連続で打てない筈の破壊光線を……。

「 “十万ボルト”！」

隙をついて、再び十万ボルトで攻撃した。
それはベトベターに直撃する。

「ピ。ピ。ピ。ピ。!!」

急に警報らしき音が鳴り響き出した。
そして、次の瞬間……。

「伏せろ! ピカチュウ!!」

「え? あ、うん」

キバナアが叫んだ通り伏せる。
その直後だった。
ベトベターが自爆したのは……!

「うお!!?」

「ヤッパリか……!!」

「うわァァ!」

やがて、立ち上がった3匹。
煙が酷い為、上の階に上がる事にした。

【第3基地 1階】

ここまで来てやっと一呼吸おく事が出来た。

地下は煙が酷すぎて呼吸が出来ない。

「ところで、何でアイツが自爆するのが分かったんですか？」

「……つい最近、アイツとよく似た感じのコイキングと戦ったんだ」

「コイキング？」

「そうだ…… そいつも本来使えない技を使って来ていた」

＊

「チッ 何なんだよ！アイツは！」

「ピピッ！ “原子の力” “水の波動”」

2連続で攻撃するコイキング。

そのコイキングもまた機械のようだ。

「な、何ッ！？」

「“コメットパン……”」

「“噛み砕く”！」

次の攻撃を始める前にコイキングに攻撃をした。
たった一撃で動かなくなった。

「フゥ…… 何者だ？ コイツ」

「ピピピピ！」

「!?!」

コイキングは自爆した。

幸い水中だった為、ダメージは少なかった。

＊

「……という訳だ」

「そのポケモンってまさかココにいたんじゃないか……」

「その可能性は大きいね……」

突然現れた謎の機械ポケモン。

サメハダーを攫った組織はココで何をしているのか？

そして、サメハダーは無事なのだろうか？

第19話 機械ポケモン（後書き）

ヒコザル「自爆したベトベターやコイキングってどうなったんだ？」

……それ、聞きたい？

ヒコザル「まさか…… 死？」

………

第20話 残酷な運命

【サフェルト基地 四階】

ティワード総督は機嫌がいい。

遂に見つけたのだ。

人間からポケモンになった人物を。

「……あのピカチュウから人間の反応があります」

「うむ 遂に見つけたぞ」

ニヤリと笑うティワード。

彼はメタルメカという名の将軍の方を向く。

「……奴を捕らえろ!!」

「イエッサー」

部屋を出ていくメタルメカ。

彼は全身を鋼の鎧で覆っていた。

守りは完璧。

更に鎧の至る所に隠し武器を装着していた。

【サフェルト基地 一階】

まだ、狙われている事に気がつかないポケモン達。
だが、それに気づくのに時間はかからなかった。

「オイ！ 何か飛んで来たぞ！！」

「はア？」

「え？ 何ですか？」

ピカチュウとキバニアが見上げる。

人が飛んでいる。

しかも、その人物は高度を下げ、降りて来た。

「貴様が例の侵入者か……」

「な、何者だ！！」

キバニアが叫ぶ。

ジェット器を背負って降りて来た人物は言う。

「俺は“連合軍”の將軍メタルメカだ

ピカチュウ、共に来て貰おう！！」

「ええッ！ 僕！？」

「てめェも基地の一味の1人か！ 俺の友を返しやがれ！！」

「れ、連合……軍？」

メタルメカは腕から鋼のロープを飛ばし、素早くピカチュウに巻

き付ける。

そして、再び飛び出そうとする。
ところが……

「待てッ！ コイツ！！」

「……………！！」

ヒコザルとキバニアがメタルメカ將軍の両肩に掴まる。
しかし、そんな事はお構いなしに飛び出したメタルメカ將軍。

「ギャアアア！！ お、落ちるウウ！！！！」

「な、何するんですかア！！？」

叫ぶポケモン2匹。

黙って掴まるポケモン1匹。

計3匹を連れメタルメカ將軍はティワードの待つ四階へと飛んでいった。

【4階 司令室】

到着したメタルメカ達。

ティワードの前にポケモン達は投げ出される。

「フフフ…… よく来た」

「な、何者だァ!？」

キバナアが叫ぶ。

困惑しているヒコザル。

連合軍……

ティトシティの戦いの時にも聞いた。

連合軍という名の集団を。

「さて、邪魔なキミ達には消えて貰おう」

ティワードはモンスターボールを取り出す。

ニヤリと不気味に笑うティワード。

モンスターボールは投げられた。

中からポケモンが現れる。

「ピピピッ！ 敵ヲ関知シマシタ 攻撃ヲ開始シマス」
「……………!!?」

3匹は言葉を失う。

キバナアは背筋が凍るような感覚を覚える。

彼ら連合軍は作り出す。

機械のポケモン達を。

「ウソ……だろ」

中から出たのは残酷過ぎる運命。
そして、キバニアの親友。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

サメハダーだった。

第20話 残酷な運命（後書き）

GW中は作者の都合で更新がストップします
また、今後は毎週火曜日に更新します

詳しくは活動報告No. 23をご覧ください
活動報告は目次ページの黒夜風をクリックすると見る事が出来ます

第21話 非道ティワード

機械になった友人。
愕然とするキバニア。
がくぜん

「さて、遂に見つけたぞ……」

ニヤニヤしながら近づいて来る。
まるでキバニアの事を気にしてない。
ポケモンを機械化する事に何の罪悪感を持たない。
それが連合軍の軍事総督・ティワード。

「そうだ…… コイツらもう要らねえや」

持っていた赤色のボタン。
それを押してしまった。
それは悲劇の始まりだった。

「ピピッ！ 爆破シマス」
「！！？」

サメハダーだった機械が言う。
その途端、機械ポケモン達は次々と自爆を始めた。

……機械サメハダーも。

「き、貴様ッ！ 何してンだァ！！」

怒り狂うキバナア。

どンドン碎け散る機械ポケモンたち。

真っ赤な炎を上げ消えてゆく。

「か、閣下！ 何をなさいます！？」

「お気は確かですか！？ ティワード総督閣下！」

幹部達や軍の将校達も驚く。

だが、ティワードは気にしてない。

しかも、その光景を眺め楽しんでいるように笑う。

「ククク…… 絶景じゃないか

ポケモンなど消えるがいい」

「こ、こいつッ！！」

抑えきれなくなつた怒り。

キバナアはティワードに突進しようとする。

だが、メタルメカが行く手を遮る。

「サーチ・レーザー」

メタルメカの銃より放たれる一筋の赤い光。
その光は一瞬の内にキバニアの頭を貫いた。
大量の血が吹き出る。

消えゆく彼の意識。

微かに聞こえた悪魔の声。

「……よくやった……メタル……」

やがて何も聞こえなくなっていた。
彼らは死んでしまった。

「さて、軍艦の艦隊に命令をだせ
サフェルト基地を破壊しろとな」
「イエッサー」

メタルメカは軍艦に命令を伝える。
それを受け取るのは忠実なドロイド兵と将校達。

「さア、我らは空の戦艦に乗ろうか……
巨大戦艦セプラキアに……」

後ずさりする2匹。

突然、激しい爆音が鳴り響く。

その爆音の少し後に基地が大きく揺れる。

軍艦の艦隊が砲撃を開始したらしい。

「さア、早く……こんな所で死にたくないだろう？」

「い、イヤだ!!」

走り出すピカチュウ。

その後に続いて走り出したヒコザル。

だが、無駄な事だった。

「“チルス・ロープ”」

メタルメカによってあっという間に捕まえられた。

2匹を捕らえたメタルメカはティワードの前に連れていく。

「よし、戦艦に乗せろ」

「イエッサー」

空中に浮かぶ海上軍艦よりも巨大な戦艦。

その中に連行されたのであった。

第21話 非道ティワード（後書き）

次回で第2章最後になると思います
前回も書きましたがこの小説は毎週火曜日に更新します

【第3章 空中の戦い】 第22話 解放（前書き）

今回から第3章スタート！
舞台は戦艦セプラキアです

【第3章 空中の戦い】 第22話 解放

【飛行戦艦セプラキア】

サフェルト基地を完全に破壊した連合軍。
その後は海上用の軍艦を全て収容。

現在は連合軍の領土であるティトシティに向け飛行をしていた。

「七武王ケイレイト様、同ジク七武王ファルア様、ゴ到着シマシタ」
「よし、通せ」

そう言うのはティワード。

七武王とは連合軍の誇る7人の超人達であった。

「私を呼んでくれたのですね……」
「僕、うれしく！」

七武王の1人、ケイレイトはブーメランを使用する人物。
性格も残酷で“残酷王”と称されていた。

ファルアは短剣と“砂時計”を使用する人物。

年齢は七武王最年少の14歳。

だが、実力はかなり高い。

「ファルアはピカチュウから“例の物”を奪え」

「了解♪」

「ケイレイトはこのセプラキアに乗っているドロイド兵の指揮を命じる」

「わかりました」

2人は命令実行の為、部屋から出て行く。
ティワードは最高司令席の方を向く。
そこには黒い服で身を包んだ人物がいた。

「“大暗黒帝”陛下　いよいよ「アレ」が手に入る時が参りました」
「そうか……　遂にこの時が来たか」

大暗黒帝は口元に笑みを浮かべる。
この人物こそ連合軍の真の黒幕だった。

「フフフ……　アレが完成すれば国際政府を一気に滅ぼす事が出来る」

「そして、“大国際帝国”が完成するのですね」

「さよう……　腐敗した国際政府に変わりヨが治める帝国が完成するのだ」

連合軍の最終目的は国際政府を滅ぼし自らの帝国を創る事だった。
単に分離・独立だけではなかったのだ。

【セプラキア 拘置所】

ヒコザルとピカチュウはココに閉じ込められていた。
扉が開き機械ポケモン1体とバトルドroid2体。
そしてリーダードroid（指揮官）が入ってくる。

「ファルア様ノ元二連行スル お前達コイツラヲ連行シロ」
「了解」

バトルドroidが近づきヒコザルの腕を掴む。

「……“突進”！」
「“十万ボルト”！」

ヒコザルとピカチュウはそれぞれ1体ずつ破壊する。
残るはリーダードroidと機械ポケモンのジグザグマ。

「ア！ ジグザグマ、コイツラヲ瀕死ニシ——」
「邪魔だ！ “火炎放射”！！」

隙を与えず即攻撃する。
あっけなく壊れるリーダードroid。

「バウウウ！」

「……やむを得ない！！！」

ピカチュウはバトルドロイドの持っていた銃を使い機械ジグザグマを撃ち倒す。

機械ジグザグマはその場に倒れる。

所々から火花や煙が出てくる。

だけど、自爆はしなかった。

「よし、逃げるぜ！」

「うん！」

2匹は走り出す。

だが、空を飛ぶ飛行戦艦セプラキアからどうやって逃げるのか…

…？

【第3章 空中の戦い】 第22話 解放（後書き）

ピカチュウ「機械ポケモンまだいたんだ……」

敵はバトルドroidだけじゃないんですよ
セプラキアにもたくさんいますよ

第23話 司令室の一件

セプラキア内部に鳴り響く警報。
早くも脱走がバレてしまった。

「気合いパンチ」！ “アイアンテール”！
「電気ショック」！ “雷”！」

次々と追ってくるバトルドロイドを破壊する2匹。
すでに何十体破壊しただろうか？
床にはバトルドロイドの残骸が散乱していた。

【セプラキア 司令室】

ここには連合軍の幹部たちがいた。
ティワードや大暗黒帝がいるのは最高司令室でここにはいない。

「クソッ！ バトルドロイドSPは何をしているのだ!!！」

監視カメラから送られてくる映像を見ながら幹部のニンダーが叫ぶ。

監視カメラの映像は全てここに送られている。

「そう焦るな　すぐに来るだろう……」

そう言うのは連合軍のプロパネ將軍。

サメハダー捕獲にも関わった人物である。

彼の言う通りまもなくバトルドロイドSPが現れた。

【セプラキア　廊下】

バトルドロイドSPは連射式の銃を両腕に装置している。

それ故、防ぐのさえも難しい。

「攻撃セヨ！　侵略セヨ！」

「クッ……　防ぎきれないよ！」

「こっちはダメだ！　一旦途中まで引き返して別の道から行くぞ！
！」

慌てて逃げるヒコザルとピカチュウ。

その後を追うバトルドロイドSP。

だが、ピカチュウ達の方がスピードが速く途中で見失った。

【セプラキア　司令室】

「つまんないなァ……」

ファルアが言う。

彼は元々、ピカチュウから“例の物”を奪う筈だった。しかし、護送を命じたドロイド達が倒され逃げられた。その為、任務を失ってしまった。

「所詮、お前子供だ^{ガキ} 大切な所が甘いんだよな」

ナード將軍は見下したような目でいう。

彼はファルアに変わって“例の物”回収の任務を受けていた。

「何だと！ 貴様ア！！」

キレたファルアは短剣を抜く。

不気味に光る先端。

ナード將軍も剣を抜く。

ざわめく司令室。

「止めな！ ナード將軍！ ファルア！」

止めたのは七武王ケイレイト。

ファルアと同じ位の人間だ。

「……………」

ようやく剣を収めた2人。

ケイレイトが止めなければ間違いなく殺し合いになっただろう。

「……僕はゲームオタクのお前がこの任務をやるなんて認めない」

そう言ってファルアは部屋から出て行った。

因みにゲームオタクというのはウソではなく真実。

職務中にさえもゲームをやるほど。

そのため連合軍内では“ゲーム將軍”とさえ言われていた。

「チッ！」

舌打ちをしてイスに座るナード將軍。

司令室の人間はこの一件は済んだと思っていた。

しかし、これが思わぬ波紋を起こす事になるのであった……

第23話 司令室の一件（後書き）

ファルア「ケッ！ ゲームオタクめ！」

ナード「何ィ！ まだ言うか！！」

……まあまあ（何

第24話 例の物（前書き）

遂に「例の物」が判明します
果たして例の物とは！？

第24話 例の物

【セプラキア 廊下】

機械ポケモンとバトルドロイドが1人の少年を先頭に行進する。
その少年は言うまでもなくファルア。

（フッフ… 見せてやる 僕的能力を！ 僕の怖さを！）

ニヤリと笑うファルア。

任務を遂行し、自分の能力を見せ付けてやろうと考えていたのだ。

その頃、ピカチュウ達はセプラキアの小型戦闘機のあるエリアを目指していた。

この戦艦は空を飛んでいる為、脱出は戦闘機を奪うしかない。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

前方からやって来る機械ポケモンとバトルドロイド。
機械ポケモンはスリープだ。

「チッ！ また機械ポケモンかよ」

「やるしかないよ！ “アイアンテール！”」

ピカチュウがアイアンテールで機械スリートを攻撃する。
だが、まだスリートは動く。

「コ、攻撃セヨ！ 破壊……セヨ」
「悪いな！ “火炎放射”……！」

それはスリートに直撃する。
だが、ここまでダメージを与えてしまえば……

「ピピッ！ 爆破シマス」

音声の後に続く爆音。
熱風と破片が飛び散る。
幸いな事にこの爆風でバトルドロイドも吹き飛ばす。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」
「また……かよ」

壊れたドロイド兵の後ろから別の機械ポケモンが現る。
スカタンクとズバット、ドカースである。

「我ラ“ドクロ部隊”ガ貴様ヲ倒ス」

機械スカタンクが言う。
それも完全に機械の声だ。

「クソッ！ “気合いパンチ” ！！」
“電気ショック”」

ピカチュウとヒコザルの攻撃。
スカタンクは簡単にやられてしまう。

「ピピッ！ 爆破シマス」

同じパターンだ。
彼ら機械ポケモンは戦闘不能もしくは戦闘不能直前になると自爆する。

そして、碎け散って死んでしまう。
本人の意味とは関係無しに。

「ピピッ！ 爆破シマス」
「ピピッ！ 爆破シマス」

爆発の影響でダメージを受けたズバットとドガースも爆破する。
散るポケモンの生命。

「クソオ！ 何でポケモン同士で殺し合いなんか……！！」
「酷すぎるよ……」

ヒコザルとピカチュウが言う。
その心は悲しみと憎しみで張り裂けんばかりだった。

「この殺し合いも世界大戦もお前の持つ“メモリーカード”を渡せば終わる」
「だ、誰！？」

声のした方向を見る。
そこにいるのは1人の少年。

「メモリーカードは僕が皇帝陛下に献上しよう」

七武王ファルア。
狙いはメモリーカードだった。

「メモリーカード？？ 何だ？ それ？」

ヒコザルが言う。

サッパリ分らないようだ。

「人工人間“サイエンネット”のデータが入っているメモリーカード知らないのか？」

「サ、サイエンネット？」

サイエンネットとは果たして……？

第24話 例の物（後書き）

今日からテストの影響で更新が不定期になります
ご了承ください

第25話 イ、イヤだ！

「さて、それを僕に渡しな」

ゆっくりと近づいて来るファルア。

その目はピカチュウに向けられていた。

「お、おい サイエネットはどうなったんだよ」

慌てて聞くヒコザル。

サイエネットについて興味を抱いていた。

だが、彼はたった一言で終わらせる。

「それを君が知る必要はない」

その一言だけで終わらせた。

ピカチュウに近づくファルア。

「メモリーカードを僕に渡せ そうすれば命だけは助けてやる」
「ダ、ダメだ！ お前なんかに渡せない！」

そう言うとはピカチュウは電気を溜める。

そして、それをファルアに当てた。

「十万ボルト」！！」

「うわァァァ！ や、止めろォ！！」

「俺も手伝うぞ！ “火炎放射”！！」

「い、痛い！ 止めてェ！！ 誰か助けて……」

泣き叫ぶファルア。

周囲のバトルドロイド達が銃を向ける。

「チッ……まずいな」

「……………」

2人は危機を感じ攻撃を止める。

ファルアはその場に倒れた。

「見事だぞ ピカチュウ、ヒコザル」

「！？」

ドロイドの群衆から現れた黒い服に身を包んだ人物。
連合軍を裏で操り、自称皇帝を名乗るこの人物。
通称“大暗黒帝”であった。

「へ、陛下……」

「何だ、お前 生きてたのか……」

ファルアを見下ろしながら言い放つ。

「もう、コイツは用済みだ フロア38に捨てろ」

「了解シマシタ」

「イ、イヤだ！ 助けて下さい！ こ、皇帝陛下……！」

顔色を変え、必死に訴えるがそれは何の効果もない。

バトルドロイド達に腕を掴まれ引きずられるようにして連行されていった。

「さて、メモリーカードを渡せ」

「イヤだ！ 絶対に渡さない……！」

「それを渡さねば人間の犠牲もポケモンの犠牲も全てが無になってしまう」

「でも……！」

大暗黒帝は両手を上げる。

それと同時に周囲のバトルドロイドや機械ポケモンも浮き上がる。

「渡すがいい！ メモリーカードをな……！」

そう叫ぶと浮き上がったドロイド兵を投げてきた。

「うわァ!!」

「何をしゃがる!!」

慌てて逃げる2人。

だが、別のドロイド兵を持ち上げる。

「ヒャーッハッハッハ! 渡さないのなら死ぬがいい!!」

“十分ボルト”!

“火炎放射”!

2人の得意とする技が炸裂する。

しかし、彼はドロイド兵を盾にして防いでしまう。

「なんて奴だ! 味方を盾にするとは」

「ハッハッハ…… ヨの世界征服を邪魔になるのなら死んでしまえ」

「奴ヲ捕ラエロ! 逃ガスナ!」

奥の方が騒がしくなる。

銃声と爆発音が鳴り響く。

「ウワァ！」

ドロイド軍を突破して1人の少年が走って来る。
それはファルアであった。

「大暗黒帝！ 貴様を倒す！！」

「ククク…… この愚か者がッ！！」

そう言うとき、凄まじい電撃を放つ。
そして、ファルアの体を浮かばせ、ピカチュウ達の方へ投げる。

「うッ…… ああッ！」

「オ、オイ 大丈夫か？」

「ヒャーッハッハッハァ！ 全員死に絶えろオ！！」

再び電撃を喰らわせようと腕を上げる。
果たしてピカチュウ達の運命は……？

第25話 イ、イヤだ！（後書き）

もうすぐテストなので更新速度が落ちると思います
赤点とらないように頑張ります

第26話 ヨを脅す気かね? (前書き)

テスト前半戦が終わりました
更新を再開します♪

第26話 ヨを脅す気かね？

【収容所】

捕まったピカチュウ・ヒコザル。

あのは大暗黒帝の一撃で戦闘不能になってしまった。
それは、もう5ヶ月も前の話。

「いつまでココに閉じ込められるのかな……？」

「さアな 永遠かもな」

毎日する事もなかっただボンヤリと過ごした5ヶ月。
セプラキアの収容所はいつも同じ。

事件が起きる訳でも無く、平和な日々が続く。

だが、その外、すなわち世界では戦争が続いていた。

【司令室】

この部屋に入って来る人物が1人。

いや、一体というべきか。

なにしろ、入って来たのは機械だ。

「戦況ハドノヨウナ感ジダ！」

「はッ！ ナード將軍率いる軍がトレジャータウンを陥落
その一方で南東の光没遺跡が奪われました」

また、ギンババ將軍ら多数の将校が死んだとの報告です！」

1人の幹部が答える。

また別の幹部が続けて報告した。

「幽郡の城を守っていたレクレイム將軍が死亡！」

幽城・砂風関・光没遺跡が国際政府の領土になりました！」

「現在このセプラキアはポートシティに向かっています」

「ヨシ、ソノママ前進シ、ポートシティニ進メ」

「イエッサー！！」

命令を出すこの機械は七武王の1人グランドロイド。

全身が機械で構成される最新のドロイドで一体しか居ない。

【収容所】

突然、扉が開き将校らしき人物が入って来る。

「お前は……？」

「私はフィールド 連合軍“ニセ”中将だ」

「は……！」

まさかの爆弾発言。

あまりの事にあ然とする2人。

「どうした？ 逃げるチャンスだぞ？」
「お、おお……」

状況がまだよく分からない。
それ故、戸惑ってしまう。

【セプラキア 廊下】

再び始まる大脱走。
今度こそ、逃げれるのか！？

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

3人を見るなり襲いかかるバトルドロイド軍団。
しかし、今回は大きな味方がついている。

「邪魔だ！ “回転斬り”！！」
「ウワァッ！」

何十体というバトルドロイドを次々と破壊する。
後に残るはバトルドロイドの残骸のみ。

「あ！ アイツだ！！」

ヒコザルが指を指す。

その先にはバトルドロイドSPが2体。

あの連射式の銃を持つヤツだ。

前回は倒せず逃げてしまったが……

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「ハアア！ “ワイド斬撃” ！！」

斬撃を飛ばし、一瞬で破壊する。

この人物はかなりの実力者なのであろう。

【司令室】

鳴り響く警報。

慌てふためく幹部達。

「最重要囚人が逃げたぞ！」

「今ドコに居ル！」

「エリア34 最高司令室の手前です！」

「ヌウ…… 俺が行ッテ捕ラエル オ前達ハ操縦・司令ヲ続ケロ」

そう言うなり最高司令室へと向かうグランドロイド。

【最高司令室】

誰かが部屋に走り込んで来た。

彼らにティワードと大暗黒帝が視線を向ける。

「フィルド！？ な、何をしに来た！！」

「そのジジイの首を取りに来た」

ティワードが焦ったように言った。

世間には自分が連合軍リーダーだと思わせていた。

その為にも大暗黒帝を見られると困るのだろう。

一方、剣を大暗黒帝に向けながら言うフィルド。

ピカチュウとヒコザルも真っ直ぐと彼を見る。

「ククク…… 冗談は止めておくがよい

場合によつては恨みをかう事になるぞ」

「残念だな これは冗談じゃない」

「ヨを脅す気かね？」

「いや、殺す気だ」

フィルドは完全に彼を殺すつもりだった。

そして、自分の実力なら殺せると思っていた。

「そうか…… なら仕方ない お前の行為は反逆として処刑してやろう」

立ち上がる大暗黒帝。

ティワードを下がらせると、剣を抜く。

「世界を憎み、世界を支配する事を望むお前の野望も今日で終わるだ!!」

「終わらん…… ヨの野望は永遠に終わらん!!」

突然、口調が強くなる大暗黒帝。

怒りと憎しみのパワーを解放したようだ。

「ハアアアア!!」

強く眩しい紫色の電撃を剣に溜める。

その剣は電撃を吸収し、パープルライトニングソード紫色系大電光剣へと変化したのだった。

第27話 フィールドVS大暗黒帝

紫色の光を放つ紫色系大電光剣。

これは大暗黒帝の愛用の武器だった。

「斬撃」！

「十分ボルト」！

「火炎放射」！！

一斉に攻撃する3人。

これらの攻撃は全て特殊攻撃だ。

しかし、大暗黒帝は剣を使い、全ての攻撃を吸収してしまう。

「チッ！ 直接やるしかないな

お前達はサイエンネットのメモリーカードを探して来てくれ」

「でも……！」

「おう！ 任せとけ！！」

ヒコザルはピカチュウの腕を握りそのまま部屋から出て行く。

大暗黒帝はチラッと見たが特に気にしてないような感じだ。

「ハアアッ！ “縦斬り”！」

上から下に剣を振り下ろす。

だが、大暗黒帝はやはり、剣で防ぐ。

「ヒャーッハッハッハ！ それ程の力でヨを殺せると思ったかッ！」

“突き抜け”！」

フィルドは突き殺そうとする。

だが、その瞬間、大暗黒帝は片腕を上げた。

「“ダーク・ライトニング”」

あの紫色の電撃をフィルドに浴びせる。

不意をつかれ、モロに喰らってしまった。

「ウワアアアッ！」

「ククク…… ハアッ！」

電撃をフィルドに喰らわせながら壁に叩きつける。

フィルドはそのまま気絶してしまった。

「あっけない奴だ さて、残りの奴も殺してやるか……」

出入口に向かう大暗黒帝。

ところが立ち止まりフィールドを見る。

少し見つめていたがニヤリと笑う。

そして、フィールドの方に向かって歩き始めた。

【セプラキア 廊下】

走る2人。勿論、ピカチュウとヒコザルだ。
しかし、その2人を妨害する者達がいた。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

廊下を埋め尽くす大軍が彼らを待ち受けていた。
バトルドロイドや機械ポケモン達の大軍だ。

「数多過ぎるだろ！ つか、うるさいし！！」
「に、逃げよう！！」

あまりの多さに驚き、慌てて逃げる2人。
その途端、戦艦が強く揺れた。

「ウワァ！」

「え？ な、何？？」

強い揺れによってよろめく2人。
バトルドロイドも倒れているものすらあった。

【司令室】

慌てふためく幹部達。鳴り響く警報。

そんな中、グランドロイドとティワード。

そして、大暗黒帝が入ってきた。

「何事だ！ 何が起きている！！」

「そ、それが！ 凄い数の国際政府精鋭軍が現れまして……」

「何ッ！ 国際政府精鋭軍だと！！」

【セプラキア外部・空中】

国際政府の大型戦闘機プローフィビの艦隊がセプラキアを取り囲んでいた。

「よし、一斉砲撃開始！ セプラキアを墜落させろ！！」

そう言うのは精鋭軍の長官ドルク。

彼とコード副長官が指揮を取っていた。

「全艦撃て！ 破壊しろ！！」

次々と砲弾を打ち込んでいく精鋭軍。

セプラキアの至る所から煙が上がり火がついている。

「よし、とどめをさすぞ！ “ダーク・レーザー” 撃て！」

「イエッサー！！」

全てのプロフィールから紫色のレーザーがセプラキアを狙い撃ちにする。

このレーザーは闇エネルギーと呼ばれる強力なエネルギーによって出来ている。

それ故、攻撃力も凄まじかった。

セプラキアが墜落するのも、もはや時間の問題。

ピカチュウとヒコザルは一体どうなるのか……？

第28話 デスパクト

【セプラキア 司令室】

幹部達が忙しそうに走り回る。

国際政府軍の出現に相当驚いているようだ。

「も、申し上げます！ 後方から巨大な飛行艇がやって参ります！
！」

幹部のニンダーがティワードに報告する。

報告するその顔は真っ青だった。

「信じられん…… いつの間にこのような飛行艇を造ったのだ……」

ティワードもこの飛行艇が造られた事は全く知らなかった。

国際政府の巨大飛行艇の名は“デスパクト”

最大乗員数は八十五万人という大兵力であった。

【デスパクト】

セプラキアの真後ろに動く巨大なモノ。

それは半壊したセプラキアに止めを刺すには十分な破壊力を持っていた。

「こちらデスパクト セプラキア後方に到着しました」
「よし、デスパクトからも攻撃を開始しろ」
「イエッサー」

デスパクトに乗っているパナート・スリが言う。

彼女は政府特殊部隊 P A R U M の副長官であった。

国際政府はティワードを始めとする連合軍の高官をここで抹殺するつもりだった。

その為、多くの兵士と優秀な人物を繰り出していた。

「ダーク・レーザー用意……撃て！」

「ダーク・レーザー発射！」

無数の紫色のレーザーがセプラキアを襲う。

セプラキアは遂にバランスを崩し傾き始めた。

【セプラキア 司令室】

傾き始めたセプラキア。

司令室は大騒ぎになっていた。

「うわァァ！ 逃げろォ！」

「もう、終わりだ!!」

「わアア…… た、助けてくれ！」

悲鳴を上げながら司令室を飛び出す幹部達。
大暗黒帝も逃げる為の命令を出していた。

「ニンダーとバント、ヨのシャトルを用意しろ 迅速に行え」

「はい、陛下」

「お任せ下さい」

ニンダーとバントは一礼する。

そして、すぐにシャトルのある格納庫へと向かった。

「……リーダー・コマンラル このフネを水平に戻せ

ヨが逃げるまで時間を稼ぐのだ」

「了解シマシタ」

リーダードロイドのコマンラル。

勿論、機械で意思など無い。

命令に忠実に従うだけのロボットだ。

「よし、ティワードよ 脱出するのでしょうか……」

「はッ！ ケイレイトとランドロイド」

連合軍高官のケイレイトのグランドロイドを呼ぶ。

現在このセプリアに乗っている高官は意外にも少ない。

大暗黒帝と表面上連合軍リーダーのティワード。

七武王のケイレイトとグランドロイド。

そして、重要幹部のニンダーとバントだけであつた。

「サイエンネットのメモリーカードを第4ブロックの重要物管理室から取って来い」

「才任セヲ 総督閣下」

「分かりました」

急いで重要物管理室へと向かう2人。

連合軍は既にピカチュウからメモリーカードを奪っていた。

【重要物管理室】

重要物管理室から1人の人物が出て来る。

高価な剣を片手に持ち、もう片方にはメモリーカードが……

「ハア……ハア…… まさかこんな物が実在したなんてッ」

メモリーカードを握り締める。

重要物管理室の奥にあるガラスケースは叩き割られていた。

「あ！ フィルドさん」

「ピカチュウとヒコザ……」

その瞬間、セプラキアが大きく揺れる。
それに続いて爆音が鳴り響いた。

「うわァ！ 何だ！？」

「だ、大丈夫かな……？」

不安そうに辺りを見渡すピカチュウとヒコザル。

周囲には斬り倒されたバトルドロイドが散乱している。
恐らく壊したのはフィルドだろう。

「すぐにシャトル格納庫へ向かおう このセプラキアも終わりだな」

走り出した三人。

セプラキアは更に傾いていく。

三人は脱出に間に合うのか？

第29話 セプラキアの終わり

危険を知らせる為に強く鳴り響く警報。

だが、その警報がなくてもこのセプラキアが危険な状態なのは分かるだろう。

それ程、何度も強く揺れ、爆音が鳴り響いていた。

「危険！ 退避セヨ！」

「危険！ 退避セヨ！」

いつもと違う事を言うバトルドロイド。

しかし、銃を向け攻撃をしてくる。

「どけ！ “回転斬り”！」

「“十万ボルト”！」

「“火炎放射”！」

所詮はザコドロイド。

一撃で破壊する事が出来る。

殆ど止まる事なく進み続けれそうであった。

【シャトル格納庫】

大暗黒帝とティワード、それにニンダーとバントがいた。

シャトルの準備は既に出来ている。
後はケイレイトとグランドロイドがメモリーカードを持ってくるのを待つのみ。

「遅いな…… 何をしておるのだ」
「申し訳有りません、陛下」

ティワードが言う。
少しの間沈黙が続く。
その沈黙を破ったのは大暗黒帝だった。

「ククク…… ケイレイトとグランドロイドは持って来ないだろう」
不気味な表情を浮かべ、ニヤリと笑う。
ティワードは驚いて彼を見る。

「ど、どういう事ですか？」
「なアに、彼女が持ってくる」
「彼女?? ケイレイトですか? でも先程……」

ティワードは意味が全く分からない。
因みにケイレイトは女性でグランドロイドは性別無しであった。

「ニンダー、バント シャトルを飛ばすぞ」
「はッ！」

すぐにシャトルへと乗り込む2人。

システムを作動させ、飛ばす一步手前になった。

「第2シャトルのナード將軍、プロパネ將軍らは出発しろ」
「了解しました 陛下」

隣のシャトルには二將軍と数人の幹部達が乗っていた。

そのシャトルは動き出し空中へと消えていった。

飛び立った直後、ケイレイトとグランドロイドが慌てたようにやって来た。

「陛下一大事デスゾ！ 重要物管理室ノ……」
「ああ、構わん…… すぐにシャトルに乗れ」
「えッ？ あ、はい」

戸惑いながらも言われるがままにシャトルに乗り込む2人。
その直後に別の人物がシャトル格納庫に入ってきた。
ポケモン二匹と人間一人。

「……大暗黒帝！！！」

フィールドが驚いて立ち止まる。
ポケモン二匹もぎょツとしたような目で見る。

「ククク…… さて、メモリーカードを渡して貰おうかね」
「そういう事だったのですか……」

ティワードはようやく解ったらしい。
彼女とはケイレイトではなくフィールドの事だった。

「黙れ！ 今度こそ……」

突然、今までとは比べ物にならない程の揺れと爆音が鳴り響いた。
天井や壁、床など至る所に亀裂が入り、今にも避けそうになる。
その途端、赤色のランプが光り、警報機の音はより大きくなる。

「エネルギープラントニテ異常発生！
エネルギー操作システム停止！
全エネルギー操作不可！ 全エネルギー操作不可！」

もはやセプラキアの運命は決まった。
連続して起こる強い揺れと爆発音。
暴走を始めたエネルギーがあらゆる所で爆発しているらしい。

「チッ！ 運のいい奴らだ…… シャトル発射させよ」
「はッ！」

動き始めたシャトル。

大暗黒帝は取り返す時間はないと判断したのだ。
もし、取り返す為に戦えば間違いなく自分達も死にメモリーカードも消える。

「そのメモリーカードを大事に持っている……」

その言葉を残し彼らも空中へと消えて行った。
フィールドもすぐに別のシャトルに乗り込む。
その後にピカチュウとヒコザルも乗り込んだ。

「よし、脱出するぞ！」

「おう！」

「ふう…… やつと脱出できるんだ」

すぐにシャトルを動かし、セプラキアの外へ飛び出す。
外に広がる白い雲、青い空。

そこへ飛び出した途端にセプラキアは大爆発を起こす。
そして、遥か下の海へと落ちていった。

【第4章 引き継ぐ者】 第30話 フィルドの別荘（前書き）

実は今章で最後です
もう、完結も近いですよ

【第4章 引き継ぐ者】 第30話 フィルドの別荘

遂に脱出を果たしたフィルド達。

メモリーカードも奪い返した。

これでようやく安心する事が出来る。

「さて、これから西にあるポートシティに向かう」

操縦しながらフィルドが言った。

といっても2人はポートシティなど知らない。

だけど、セプラキアから脱出できた今、ドコへ向かおうと構わなかった。

シャトルは白く美しい雲をかき分けながら進む。

まだ知らない土地ポートシティを目指して……

【国際政府首都 グリードシティ】

ここはグリードシティ・国際政府議事堂のとある所。

全身に黒い布に包まれた男、大暗黒帝とティワードがいた。

何故、国際政府最大の敵がここに……？

「計画は順調に進んでいますな陛下」

「ヨの思惑通り奴らはポートシティに向かった
これで“神の復活”に一步近づいたわ……」

「ところでピカチュウとヒコザルはどうします？」

「奴らにもはや用などない 次の作戦で殺せ」

「はい 陛下」

ティワードは用意してあったシャトルに乗り込む。

大暗黒帝はシャトルに乗らない。一体どういう事なのか？

結局、シャトルに乗ったのはティワードのみ。

そのまま出発してしまった。

「ククク…… 神の復活と共にヨもまた神となるのだ」

大暗黒帝の最終目的。

それは自ら神となり世界を支配する事だった。

神になれば不老不死の存在となり永遠に世界を支配できる。

ただ単に世界征服ではなかったのだ。

【ポートシティ】

静かな街で事件などめったに起こらなかった。

フィルド達も既にココに到着し、とある家の前に来ていた。

「ココってどこ何だ？」

「パナート・スリが居るといいんだが……」

ヒコザルの質問に答えずインターホンを鳴らす。
少し経ってからスピーカーから声がしてきた。

「どちら様ですか？」

「フィールドだ パナート・スリはいるか？」

「え、ええ 居ますケド……」

「フィールドが来たと伝えてくれ」

「はい、分かりました」

しばらくすると家の中からスリと1人の少年が出て来た。
この少年はパナート・スリの息子でヒョール。
第2ポート中学校に通う13歳のごく普通の少年だ。

「例の物についてだ 少し話がある」

「……分かった ヒョールしばらく外に居て」

「うん 分かった」

パナート邸に入っていく2人。

外にはヒョールとポケモンが残された。

「ねえ、君たちってポケモントレーナーに飼われているの？」

突然、ヒョールが聞く。

困みにヒョールはポケモントレーナーで2匹のポケモンを持って

いた。

「いや、俺たちは独立したポケモンだから飼われていない」
「へー、そうなんだ」

数分後、フィールドが家から出て来た。
もう話は済んだらしい。

「……行くぞ」
「おう！ さ、行こうぜ ピカチュウ」
「うん じゃあね」

別れを告げパナート邸をあとにしたフィールド達。
日が傾き、夕方になっていた。

「これからどうするんだ？」

もう夜も近く、これからどうするのか気になったヒコザル。
まさか、こんな街で野宿をする訳にはいかないだろう。

「……パナート邸から近い別荘に行く」
「別荘？ お前のか？」
「ああ、そうだ ポートシティに別荘を持っているからな」

ヒコザルとピカチュウは疑問を抱く。
別荘を持っているのなら相当金持ちなのであろう。
それにあの剣の使い方にも疑問を抱いていた。
あれ程の使い手なら相当実力も高い。
あの剣術はどこで学んだのか？
それに確か元連合軍の中将。
何故、連合軍を裏切ったのか……？
実力の高さに仲間から嫉妬されたのか？

「ココだ ついたぞ」
「……………」

家の中に入る3人。
部屋は片付けられていてキレイ。
ムダな物なく質素な感じ。
と言いたい所なのだが実際は……

「ああ…… ずいぶん散らかってやがる」
「……………（汗）」

床には大量の紙が散らばっていた。

第31話 下る命令

ヒコザルは適当に一枚の紙を拾ってみる。
なにやら、政府軍の事について書かれていた。

『・新規編成部隊一覧

P A R U M 攻撃部隊 P A R U M 治安部隊

P A R U M 拷問部隊 P A R U M 捕獲部隊

・廃止部隊一覧

P A R U M 怪盗撲滅部隊

P A R U M 借金取り立て部隊』

ヒコザルの脳内に“？”の文字が浮かぶ。
そして、強い疑問が浮かんた。

(P A R U M って何？)

一方、フィールドは箱の中から何かを取り出していた。
それは、銃のようであった。

「何ですか？ それ？」

「これはP A R U M 親衛部隊の使うレーザー銃だ 念の為持ってい
ろ」

そう言ってそれを放り投げる。

ピカチュウは上手くキャッチする。

一方、ヒコザルは慌てて取る。

紙を持っていたのと考え中だった。

その為、放り投げた事に気づくのが遅れたのだ。

【トレジャータウン 連合軍第7基地】

ティワードの乗ったシャトルが格納庫に到着していた。

その基地にいた幹部・将校が出迎える。

「ようこそ ティワード総督閣下

お待ちしておりますぞ……」

連合軍の副総督コマンドが出迎える。

彼は組織・財閥連合のリーダーであった。

しかし、財閥連合が連合軍に加わってからは最高権力の地位を失った。

それでもまだ連合軍N.O. 3（大暗黒帝を含む）の地位で大権を握っていた。

「うむ さっそくだが会議室にナード將軍を呼べ！」

「はッ！」

コマンドはすぐに同じ事をコモットに命じる。
コモットは財閥連合時代からコマンドの側近だった。
そして、現在は連合軍の幹部の地位にある。

【会議室】

会議室に呼ばれたナード將軍が入ってくる。
彼はセプラキア脱出がココに来ていた。

「何でしょう？ ティワード総督」

「今度の軍事作戦はポートシティで行う」

「そうですか（何で俺に言うんだよ）」

「その指揮官はお前でいいな？」

実はポートシティでの軍事作戦はかなり重要なものであった。

「はっ！ 了解しました（お前が行きやがれ）」

数日があるとある任務を受けたナード將軍は四十万の大軍を率いて出発した。

行き先はポートシティ。

つまり、フィールド達の居るところであった。

第32話 ポートシティin抹殺地獄

【国際政府軍の陣営】

ここにポートシティの地方軍が集結していた。
だが、その兵力は十万人。
指揮官はロガという将軍だった。

「ロガ将軍、連合軍のドロイド輸送艇が見えました」
「来たか……」

同じ頃、連合軍側も既に国際政府地方軍を発見していた。

「よし、リーダー・コマンバク攻撃命令を出せ!!」
「第一軍ハ攻撃ヲ開始セヨ」

ナード将軍の近くに居た黄色のリーダー・ドロイドが命令を出す。
それと同時に砲撃を始めまる。

「ロガ将軍、攻撃が始まりました!!」
「慌てるな 此方も攻撃を始めよ!!」
「はっ」

そう言うときポート軍側も攻撃命令を出す。
忽ち、空が暗くなる程の砲撃が飛び交う。
だが、装備は連合軍の方がすぐれていた。
次々と倒れる国際政府地方兵。

「ロガ將軍！ 防壁が破壊されます！！」

「援軍の到着まで持ちこたえろ」

しかし、それはほぼ不可能であった。

この国際政府軍側の防壁は緊急に造った物でそれ程、強度はない。
ホント残念な事に。

連合軍に突破されるのは、もはや時間の問題。

「B－4ブロックに集中攻撃しろ」

「B－4ブロックに集中攻撃せよ」

全ての戦車が一点に集中攻撃をする。

凄まじい爆音と共に防壁は遂に崩壊した。

「ポートシティ内に侵攻開始！！」

「了解シマシタ」

同じ頃、国際政府軍の陣営では……

「全軍を撤退させよ」
「はっ」

撤退を余儀なくさせられた。

「全ドロイドを輸送艇から降ろし、ポートシティを占領しろ」
「了解デス」

「ポートシティの住民共も邪魔なら殺して構わん!!」

次々と戦車から現れるドロイド軍団。
その数、三万體。

「さア、ポートシティを占領し、「例の物」を回収しろ!!」

絶叫するポートシティの人々。

混乱が混乱を呼び、ポートシティは地獄と化す。

逃げ遅れればドロイドに殺される。

反撃すれば殺される。

ドロイドに出くわせば殺される。

名付けてポートシティin「抹殺地獄」!!

「侵入して五分経ったか まだ見つからんのか？」

「申し訳御座イマセン」

「戦闘ドロイドEXも起動させて搜索しろ!!」

「了解シマシタ バトルドロイドEX……起動セヨ」

バトルドロイドEX……

普通のバトルドロイドより大きく攻撃力・防御力の高い高性能なバトルドロイドだ。

1体1体が強力なバズーカ砲を持っている。

「命令ヲ下ス 例ノ「メモリーデータ」ヲ探シダセ」

次々とポートシティに入って行く。

彼らを止める者はもう居ない。

居るのは逃げて行く人々だけであった。

第33話 VS機械ボーマンダ

あっけなく突破された前線。
大量のバトルドロイドがポートシティに押し寄せて来た。

【フィールド別荘】

爆撃音や悲鳴などはフィールドの別荘にも聞こえて来た。
そして、空の雲が赤くなる。
ポートシティの一部が炎で燃えているのだろう。

「くそオ！ こんな所まで来たのかよ!!！」

レーザー銃を持つ手が震える。
“あの時”の恐怖が蘇る。

（攻撃セヨ！ 破壊セヨ！）

（ア！ 敵ダ！ 殺セ！）

（新タナ敵ヲ発見）

（お前ら……!!）

脳裏にあの忌まわしきティトシティの戦いが浮かぶ。
今回はポートシティ。
また、悲劇が繰り返される……？

「ヒ、ヒコザル？」

「落ちて、どうした？ 顔色悪いぞ」

心配そうに見つめるピカチュウ。

いつも通りの無表情フィールド。

また、自分の周りの人物が消えるのか……？

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「……………！！？」

すぐ近くからバトルドロイドの声。

辺りを見渡せばなんと窓の側に……

しかもそいつは銃をコッチに向けていた。

「攻撃セヨ！ 破壊……」

音を立てて窓が割れる。

「……壊れたか」

先に発砲したのはフィールド。

バトルドロイドはそのまま倒れる。

「ここも危ないな 行くぞ！」
「う、うん」

何かが詰め込んであるバックを持つフィールド。
そしてすぐに別荘を飛び出した。
外にはバトルドロイドや機械ポケモン。
国際政府地方兵や国際政府防衛兵。
それに逃げ惑う人々が入り混じっていた。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

突然、フィールド達の前に一体の機械ボーマンダが降って来た。
上を見ると連合軍の小型戦闘機が飛んでいた。

「チッ！ “^{インパクト}衝撃弾”！」

フィールドは魔法攻撃で機械ボーマンダを迎え討つ。
その魔法攻撃はボーマンダの首に直撃する。

「ビビ……」

口を開けエネルギーを溜める機械ボーマンダ。
口内に光の球体が出来る。

「火炎放射」！ “オーバーヒート”！！」

「雷” “十万ボルト”！」

「突き” “大斬撃”！」

危機を感じた3人は一斉に攻撃する。

その攻撃は全て機械ボーマンダに直撃した。

そして、口内のエネルギー体が爆発する。

「ピ……ビビッ……」

その場に倒れる機械ボーマンダ。

どうやら激しい攻撃で機能停止になったらしい。

「フウ…… 危なかったな」

壊れた機械ボーマンダを見ながらフィールドが言う。

もう完全に壊れたのか機械ボーマンダは動き出しそうになかった。

第34話　じゃあな

【ポートシティ】

次々とやって来るバトルドロイド兵。

誰も止められない連合軍。

もはやポートシティは占領されるしかないのか？

「火炎放射」！

“十万ボルト”！

「破壊セヨ！　侵略セヨ！」

攻撃しながら血路を開くフィールド達。
でも、もう体力の限界が近かった。

「フィールド！　アイツだ！」

「……バトルドロイドSPかッ！」

バトルドロイドの後ろからやって来たバトルドロイドSP。

ピカチュウとヒコザルセプラキアではコイツらに負けていた。

「攻撃セヨ！　破壊セヨ！」

「うわァ！」

ヒコザルがその場に倒れる。
肩にレーザー弾が当たったらしい。

「だ、大丈夫!？」

「ウッ……グッ……!」

苦しそうな声を上げるヒコザル。
肩から血が流れる。

「ハアハア……俺もここまでか」

「何を言っている! まだ動けるだろうが!」

連合軍の猛攻を防ぎながら叫ぶフィールド。
ピカチュウも必死に攻撃を防ぐ。

「攻撃セヨ! 破壊セヨ!」

「攻撃セヨ! 破壊セヨ!」

雲霞のように押し寄せるドロイド兵。
この数を防ぐのは至難の技だ。

「……俺が逃げ道を開いてやる」

ヒコザルはいきなりフィルドのバックから大量のダイナマイトを持ち出す。

そして、それを自分の体に巻きつけていく。

その作業にフィルドもピカチュウも気づかない。

「……どうせ死ぬのなら一体でも道連れにしてやる」

大量のドロイド兵を睨む。

自分の両親を殺した憎い敵。

今またコイツらによって自分の仲間が殺されようとしている。

でも、今度は殺させない。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「クッ……！ “30連衝撃弾”……！！」

必死に防戦するも多勢に無勢。

全く減ってない感じた。

「……フィルド、ピカチュウ　じゃあな」

「……ヒコザル……！！」

「え？　ちよっ……」

バトルドロイド軍団に向かって走り出したヒコザル。
フィールドとピカチュウにも何をしようとしているのか分かる。
自らの命と引き換えにドロイド軍団を吹き飛ばす気だ。
全てのダイナマイトを使い自爆する気だ。

「破壊セヨ！ 攻撃セヨ！」

「ウオオオオオ！！」

ドロイド兵はヒコザルに気づき射撃する。
しかし、ヒコザルは高くジャンプして避ける。
だが、避けれるのはココまで。
空中では避けない。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

ドロイド軍団のと真ん中へと突っ込んでゆくヒコザル。
銃弾が導火線をかすり着火する。

「破壊セヨ！」

太陽のごとく眩しい光。
そして次の瞬間、地を裂くような爆発音が鳴り響いた。

第35話 やって来た縦長飛空艇

【ポートシティ 上空】

ポートシティ上空に大量の小型飛空艇が飛んでいた。その中心に小型飛空艇に守られるようにある大型飛空艇。だが、この大型飛空艇は縦に長く特殊な形をしていた。それは、まるで飛ぶ建物にも見える。

「これより作戦を開始する P A R U M全部隊降下せよ」

全ての飛空艇に通信が入る。

この軍隊は国際政府の軍隊だった。

一斉に高度を下げる P A R U M飛行部隊。

あの縦長の飛空艇も高度を下げる。

一体、この縦長の飛空艇は何なのだろうか？

【ポートシティ】

暴れ回る連合軍のドロイド軍。

多くの人々が彼らに殺されていった。

「攻撃セヨ！ 破壊セヨ！」

「かれ！ ドロイド共を吹っ飛ばすぞォー！！」

ポートシティの人々は立ち上がった。
破壊されたバトルドロイドの武器を奪い連合軍に抵抗していたのだ。

彼らは敗北し、あっけなく引き上げた国際政府軍に変わり反撃をしていた。

「撃て！ 撃てェ！」

「破壊セヨ！ 侵略セヨ！」

次々と押し寄せる連合軍。
既に残りの三十七万体のドロイド兵・機械ポケモンを起動させていた。

抵抗するポートシティの市民軍三万。
いまだに戦う国際政府軍は五万。
合計して八万。

それは多勢に無勢であった。

「うん？ 何だアレ？」

「オ、オイ アレ縦長の物体じゃないのか？」

「国際政府軍……だよな？」

ざわめく抵抗軍。

指をさして、他人に教えている者もいる。

不気味な黒色の縦長飛空艇。

それはフィールド達も見ていた。

「な、何ですか！？　アレは？」
「……………！！？」

ピカチュウに言われ上空を見る。
その途端フィールドは顔色を変える。
ピカチュウはそれを見逃さなかった。

「何か知っています……………よね？」
「……………」

フィールドは何も言わない。
だが、彼女は知っていた。
あの飛空艇の中に眠るモノも…………

「…………お前は逃げろ」
「え？」

突然、「逃げろ」と言うフィールド。
ピカチュウはどうしていいか分からず立ち尽くす。
そんなピカチュウの事は気にせず歩き始める。

「…………フィールド副長官！」

空から飛行性能を持つバイク（のような物）が降りて来る。
白色の装甲服を着ているところを見ると国際政府の兵士なのであ
ろう。

「P A R U M飛行兵か？」

「はい、そうです フィルド副長官ですよね？」

「……私はもう副長官ではない 今の副長官はパナート・スリだろ」

「え？ 任務を果たしたのでP A R U Mに戻るのではないのですか
？」

「……“アレ”をどうするつもりだ？」

その兵士の質問は無視し、空中に浮かぶ縦長の飛空艇を指差して
言う。

そのP A R U M飛行兵はすぐには答えを言わなかった。

数秒ほどの沈黙の後に答えた。

「戦争に使用するつもり……です」

「何だと！ 連合軍から奪ったらずくに破壊するのではないのか！
！」

血相を変え怒鳴るフィルド。

P A R U M飛行兵は後ずさりする。

「と、突然P A R U M長官レイズ閣下が方針を変えまして……」

「チッ！ あの大馬鹿野郎！
なぜ“アレ”を連合軍が使用しなかったかを考えないのか！！」

ピカチュウはサッパリ話についていけず聞く事しか出来ない。
そんなピカチュウに構わず話は更に進む。

「どういう事ですか？」

「……“アレ”は制御不能の半機械・半ポケモンの怪物」

「機械……ポケモン……機械ポケモンですか？」

「奴は制御不能 いや、人が使うのは不可能のポケモンだ」

「でも機械ポケモンがまさか従わないなんて……」

“アレ”は絶対に従わない 意志が異常な程強いポケモンだ」

「意志ですか？」

「そう、意志だ 人間を心の底から憎み人間に対する復讐を考えて
いる」

フィールドは拳を握る。

額から汗がにじみ出ている。

「“アレ”を放ったら連合軍どころか国際政府軍もポートシティ市
民も死に絶える」

「ええッ！？ 国際政府軍もですか！？」

「私がレイズを止める 何としてでも止めないと……」

そう言うとPARUM飛行兵の乗って来たバイク（みたいな物）

に乗る。

そして、エンジンを起動させ飛び立とうとする。

「待って！ 置いて行かないで！！」

「ワアッ！ 何を……！！」

突然、ピカチュウがフィールドの肩に掴まった。
ピカチュウも付いて行くのであろうか？

第36話 バトルグランドへ

【縦長飛空艇 バトルグランド】

大量のP A R U M飛行艦隊に守られたバトルグランド。
この飛空艇は元々連合軍の物であった。

それがある日、P A R U Mが奪い占領したのだ。

奪った後は破壊される筈であった。

しかし、P A R U M長官レイズが方針を変えた。

彼は内部に眠る兵器を利用しようと考えたのだ。

内部に今はまだ眠る兵器……

それは強力な破壊力を持つ機械ポケモンであった。

しかし、操作は誰にも出来なかった。

その機械ポケモンは何度もP A R U Mに反乱を起こした。

結局、使いこなすのは不可能と見たレイズ。

彼はこのポートシティにそれを放つ気でいたのだった。

「……オイ！ 何か飛んで来るぞ！！」

「アレは……フィールド元副長官！？」

軍用小型飛行バイクに乗っていたのはフィールドとピカチュウ。
結局ピカチュウも着いて来たのだ。

「フィールド前副長官だ！」
「どうしてココに？」

ざわめくP A R U M兵器守備兵たち。

その部隊をまとめる兵器守備長官クロードに通信が入った。

「兵器守備長官クロード フィルドを撃て」
「はい 閣下」

通信が切れるとクロードはすぐに命令を下す。

「フィールドを撃て」
「え？ いいんですか？」
「早くしろ！」
「イエッサー！」

たちまち銃撃を始めるP A R U M軍。
だが、フィールドは上手く回避しながら近づいて行く。
距離はどんどん縮まる。

「“回転斬り”！！」
“十万ボルト”！！」

2人共P A R U M兵士に向かって攻撃する。
彼らはあっけなく次々と吹っ飛んでいった。

「ウワァ！」

「降りて来たぞ！」

「逃げろ！！」

フィールド達に恐れをなして逃げる兵士達。

だが、1人だけ残る人物がいた。

兵器守備長官クロードだ。

「ここから先には通さんぞ！！」

「……クロード！」

フィールドがクロードに気づく。

彼女は剣を取り出し、斬撃を飛ばす。

「“斬撃”！」

「“四連・射撃”！」

クロードは特殊なレーザーガンで攻撃する。

このレーザーガンは一回撃つたびに2発出て来るのだ。

「……………」

フィールドは即座に避ける。

一方、斬撃はクロードに直撃した。

彼はその場に倒れる。

「よし、行くぞ」

フィールドがピカチュウに言う。

2人はバトルグラウンドへと入って行った。

第37話 兵器の正体（前書き）

今回は兵器の正体が明らかになります

第37話 兵器の正体

【バトルグランド】

元々は連合軍のとある施設だったバトルグランド。
今は国際政府が占領し、内部にある兵器を利用しようとした。
でも、その兵器は国際政府に従わず、抵抗を続けた。

「フィールドさん！ 奥に何か有りますよ！！！」

その兵器は機械化されたポケモン。

人間を恨み続けるポケモン。

そして、とあるポケモンのDNAから作られたポケモン。

「これは機械ポケモンの……」

「そ、そんな……！ まさか……！！！」

バトルグランドの細長い廊下の先。

バトルグランドの奥深くにその兵器は封印されていた。

「……人間ヲ感知 破壊スル」

人間に生み出されたポケモン。

人間を心の底から恨むポケモン。

「こいつは最強の機械ポケモン……」

「攻撃ヲ開始スル」

「機械ミュウツーだ!!」

ミュウのDNAを組み替えられて作られたポケモン。
それがミュウツーだった。

「思イ知レ! 人間共ヨ! “波動弾”!!」

機械ミュウツーは片手を上げ波動弾を撃つ。
その波動弾はまっすぐフィールド達を目掛けて飛ぶ。

「“十万ボルト”!」

ピカチュウが波動弾を十万ボルトで打ち消す。
しかし、機械ミュウツーは次の攻撃を行おうとしていた。

「消エロ! “7連・レーザー光線”」

「レーザー光線!」

「伏せろ! ピカチュウ!!」

機械ミュウツの両手から放たれるレーザー光線。

このレーザー光線は機械化された為、撃つ事が出来る。

本来、ポケモンは覚える事の出来ない技だ。

ピカチュウとフィールドは伏せていた為、喰らわずに済んだ。

「愚カナ者達ダ “サイコキ……”」

「死ね！ “エレキ・ソード”」

「……………!？」

フィールドは次の攻撃が始まる前に機械ミュウツを攻撃する。
不意をつかれた機械ミュウツは少しよろけたが……

「コノツ！ “冷凍ビーム”！」

「ああッ!!」

近距離で冷凍ビームを喰らったフィールド。

冷凍ビームの当たった部分は腕だった。

「くゥ……」

「オ前カラ死ヌガイイ！ “十万ボルト”!!」

「キャアアア!!」

悲鳴を上げるフィールド。

この十万ボルトもまた近距離で喰らっていた。

「フィールドさん！ 今助けます！！」

ピカチュウがフィールドを助けようと走り出す。

機械ミュウツーはフィールドへの攻撃を止めピカチュウを見た。

「フン！ ピカチュウノ分際デ…… “破壊光線”！」
「！！」

今度はピカチュウに攻撃をする。
その瞬間、フィールドが叫ぶ。

「ピカチュウ！ 伏せろ！！」
「は、はい！」

ピカチュウは慌てて伏せる。

破壊光線はピカチュウの頭上を通り過ぎ、壁にぶつかる。

その途端、壁に入る大量の亀裂。

大きくゆれたバトルグラウンド。

もし、直撃したらかなりのダメージを負っていただろう。

一体、強力な力を持つ機械ミュウツーにどうやって勝つのか？

第38話 VS機械ミュウツー

「余計ナ事ヲ言イヤガッテ！ 死ネエ！ “電撃波”！！」

ピカチュウにアドバイスを言った事にキレル機械ミュウツー。
今度はフィールドが危機に陥った。

「止めろオ！ “十万ボルト！！”」

「ウオオオ！」

十万ボルトで機械ミュウツーは吹き飛ばされる。
そのまま彼は壁に叩きつけられた。

「ヌウウ……！ “50連・レーザー光線”！！」

全身から大量のレーザー光線を飛ばす機械ミュウツー。

フィールドはP A R U M軍の使用する防御アイテム・バリアを使い、
ピカチュウは“守る”で防ぐ。

レーザー光線の大半は2人にかすりもせず壁や床に当たる。
更に入る大量の亀裂。

次々と崩れていく壁と天井。

このまま戦闘が続けばバトルグラウンドは墜落してしまうだろう。

【ポートシティ 司令飛空艇】

P A R U M 長官レイズ。

彼は司令飛空艇に居た。

「何ッ!? フィルドがバトルグラウンドへ入ったと!?!」

「はい 現在、機械ミュウツ―と戦闘を繰り広げているとの情報です」

「機械ミュウツ―を失ったら我が軍は大損害を被るぞ!

よし、至急バトルグラウンドに兵を向かわせろ」

「イエッサー!」

レイズはまだ機械ミュウツ―を支配できと思っていた。
もちろん、それは不可能。
でも、彼にはそれが分からなかった。

「……しかし、機械ミュウツ―のエネルギー源である“ドラゴントレジャー帝龍宝”の力は凄いな」

レイズがポツリと言う。

なんと帝龍宝は実在する物だったのだ。

そして、その帝龍宝は……

【バトルグラウンド】

まだまだ続く戦闘。

フィルドとピカチュウは何度も攻撃するがなかなか倒せない。

「リーフ・ソード」

“雷”

「喰ラエ！ “2連・レーザー光線”」

直線的に飛ぶレーザー光線。

撃たれ所が悪けれど即死もあり得る。

「クッ！」

「うわァ！」

なんとか回避する2人。

しかし、時々かする事もあって所々血が出ていた。

「このままじゃ何時かやられちゃうよ！」

「ピカチュウ！ アイツの腹を狙え！！」

「え？ お腹？」

「そうだ！ そこが奴の弱点だ！！」

機械ミュウツーの腹部には星型の宝石のような物がついていた。
それこそ帝龍宝であった。

正式名称はドリームストーン。

この世界に10個有るといわれていた。

「あの紫色の物ですね！ “雷”！」

ピカチュウは早速、ドリームストーンを目掛けて雷を繰り出す。
それはドリームストーンを守っていたシールドを破壊する。

「オオツ……！ 貴様ア……！」

シールドが消えた事により焦りを感じ始めた機械ミュウツー。
再び両手からレーザー光線を飛ばし始めた。

第39話 無限・レーザー光線

レーザーを飛ばし攻撃する機械ミュウツィ。
フィールド達は避け、一瞬の隙について攻撃する。

「十万ボルト」！
「斬撃」！

中央のドリームストーンを狙って攻撃する。
しかし、その攻撃はレーザー光線で消されてしまう。

「ソウ簡単ニハ殺ラレンゾ！ “波動弾”！」
“雷”！」

雷で波動弾を打ち消すピカチュウ。
しかし、これではその内、体力が無くなってしまう。
だが、フィールドはもう一つ危惧している事があった。

【バトルグラウンド外部】

飛び回る大量の小型飛空艇。
小型飛空艇一機につき30人の兵士が乗っていた。

「……では、バトルグラウンドへ兵を送り出します」
「うむ、フィールドは生かして捕らえろ」
「イエッサー」

次々と近づく小型飛空艇。
バトルグラウンドへ乗り込む気であった。

【バトルグラウンド 内部】

内部では機械ミユツとの戦いが続いていた。
形勢はほぼ互角といった所。

「レーザー………」
“死ねッ！ インパクト 衝撃弾”！！」
「喰らえ！ “十万ボルト”！！」
「ナッ………！」

僅かな隙をついて攻撃した。
その攻撃は機械ミユツの唯一の弱点。
……ドリームストーンに直撃した。

「グッ！ オオッ！！」

体中から煙と所々から火を噴きながら倒れる。

遂に機械ミュウツーを敗北させた。
これでフィールド達の勝利は決まった。
……ハズだった。

「やった！ 僕達勝ちましたね！」
「……一件落着だな」

そう言いフィールドは武器をしまう。
ピカチュウも安心してその場に座り込む。

「動くな！」
「手を後ろで組んでこっちへ来い！」
「武器はそこへ置け！」

フィールド達は後ろを見る。
そこには100人くらいのPARUM攻撃兵が居た。
全員が銃を持ちフィールド達を狙う。

「そ、そんな！」
「チッ！ バトルが終わるのを待っていたか」
「黙れ！ グズグズしてい……！」

その兵士は銃を下ろし後ずさる。
後方の兵士達も、騒ぎ始める。

フィールドは一瞬にして最悪のシナリオを思い浮かべた。
それは、機械ミュウツの……

「オ、オモイシレ……ニンゲンドモ!!」

機械ミュウツは復活した。
いや、まだ生きていた。

「う、うわァ！」

「動いているぞ！」

「まだ壊れてないぞ！」

「キエロオ! “無限・レーザー光線”!!」

機械ミュウツの全身から数え切れない程のレーザーが発射される。

それはPARUMの兵士、バトルグランドの壁。
床から天井まで何もかもを破壊し始めた。

【バトルグランド 外部】

バトルグランド外部はすでに大混乱に陥っていた。
逃げようとするPARUMの兵士達。
怒号、絶叫、悲鳴が入り混じる。

「早く行けよ！ 邪魔なんだよ！！」

「バトルグラウンドが墜落するぞ！」

「邪魔だ！ てめェ！！」

「押すんじゃねえ！」

「オイ！ 俺も中に入れろ！！」

「他の飛空艇に乗れ！」

もはや大混乱では済まされない程になってきた。

アチコチで自分だけでも助かろうとする兵士達。

その兵士達は銃で味方の兵士達を殺し始めた。

更に、飛び立った小型飛空艇もただじゃ済まない。

乗り込んだ人数が多すぎていた。

そのためバランスを崩し、バトルグラウンドに激突する飛空艇。

激戦が繰り広げられるポートシティに墜落する飛空艇まで現れた。

【大型飛空艇 プローフィビ】

次々と通信が入っていた。

それは言うまでもなくバトルグラウンドの兵士からだ。

『至急援軍を！ バトルグラウンドは大混乱で……』

『申し上げます！ 機械ミューツァーがバトルグラウンドを破壊し……』

「ええい！ 通信を切れ！！」

「イエッサー」

通信を切ると司令室は一瞬にして静かになる。

そして、レイズから他の飛空艇に通信を入れた。

第40話 ポートシティ大破局

『全小型飛空艇に命令に命令を下す！』

これよりバトルグラウンドを集中攻撃せよ

機械ミュウツー及びフィールドを抹殺せよ！』

もはや機械ミュウツーを抑えるのは不可能と考えた。
だから壊す事にしたのだった。

「よし、砲撃を開始……」

レイズが砲撃命令をしようとしたその時だった。
バトルグラウンドが凄まじい爆音と共に崩壊したのは……

「うわアアア！」

「助けてくれえ！」

「うわアア！！」

悲鳴を上げながら残っていた兵士達が転落していく。
飛び立てなかった飛空艇もまた同じ運命を辿った。
全て、下のポートシティへと落ちていった。

「申し上げます！ バトルグラウンド内部からレーザー光線が……」

「な、何ッ!？」

高度を下げていくバトルグラウンド。
そこからレーザー光線が飛ぶ。
しかも、時間が経過するにつれ増えていく。
まだ機械ミユツウが生きていた。

「オモイシレ! ニンゲンドモヨ!!」

次の瞬間、大量のレーザー光線が全ての物を襲う。
バトルグラウンドを攻撃していた小型飛空艇。

「うわァ!」

「操作が効かないぞ!」

ポートシティに侵攻した連合軍。
連合軍に抵抗する大勢の人々。

「攻撃セヨ! 破壊セヨ!」

「撃ちまくれえ! ぶっ壊してしまえ!!」

「バトルドロイドSP部隊ヲ投入セ……ウワァ!」

「何だ!? レーザー光線だ!!」

「うわァ!」

「ギャァァッ!!」

「コチラ、リーダー・コマンペル
上空ヨリレーザー光線ガ……ウワァ！」
「逃げる！ 無差別に攻撃してくるぞ……！」

ポートシティ外部にて指揮を取るナード將軍。
そこにまでレーザー光線が飛んできていた。

「何が起きた！ 応答しろ！ コマンペル……！」

「將軍閣下 急ぎ退避ヲ！ 国際政府ノ無差別攻撃デス」

「無差別攻撃だと……？」

「ハイ 市民も政府軍も連合軍も無差別攻撃デス」

「よし、ポートシティの近く、ポート基地に引き返せ」

「イエッサー」

既に政府軍との戦い、この無差別攻撃で連合軍は多くの兵を失っていた。

もはやこれ以上の戦いは無益。

そう考えたナード將軍は全軍に撤退命令を出した。

【大型飛空艇 プロファイビ】

プロファイビは奇跡的に無傷であった。
司令室には次々と情報が入ってくる。

「バトルグラウンド墜落！」

「ポートシティの連合軍は壊滅しました」

「機械ミューツの生命反応なし！」

「攻撃もストップしました！」

口々に情報を伝える幹部。

レイズはそれを聞いていたが命令を下す。

「よし、炎が収まったらすぐに着陸させろ」

「イエッサー」

司令室は未だに慌ただしく動いていた。

一方、フィールド達はどうなったのか？

少なくともこの司令室の人間は誰一人安否を知らなかった。

第41話 十万ボルト

壊れたバトルドロイド。

墜落した国際政府の飛空艇。

蒼い空がそれらを見下ろしていた。

——崩壊都市ポートシティ。

「ん……ここは……？」

壊れたバトルグランド。

一人の女性が立ち上がる。

——フィールドであった。

（そうか、バトルグランドか……）

周囲を見るフィールド。

大量の鉄クズ。死んだP A R U M攻撃兵。

そして、すき抜けるような蒼い空。

（ピカチュウがない……）

フィールドの周囲にあるのは兵士の死体。
そして、バトルグランドの残骸のみ。

(どこに行った……？ いや、生きているのか？)

彼を探そうと歩き始める。

その瞬間、声が聞こえてきた。

「こちら、バトルグラウンド捜査隊 フィールドは発見できませんでした」

白の装甲服を着た人間。

P A R U Mの兵士に違いない。

その兵士は無線機を使い本部と連絡を取っていた。

「……では、引き続き捜査を行います」

その兵士は通信を切り、無線機をしまう。

————ハズだった。

「“十万ボルト”！」

「グエエエッ！」

突然電撃を浴びた兵士。

フィールドは電撃が飛んできた方向を見る。
黄色の生物が動いたのが見えた。

「ピカチュウ？ ピカチュウか！？」

しかし、そいつは返事をせずに走っていった。
フィールドは慌てて追うが、見失ってしまう。

「オイ！ どうした！ 何があった！！」
(……………！)

通信はまだ切れていなかった。
どうやら、通信を切る前に倒してしまったらしい。
フィールドは落ちていた無線機を取る。

「状況を報告し……」

「問題ありません」

「何？ 本当か？」

「バトルドロイドが一機だけ動いていたので破壊しました
長官に連絡をして下さい この方面の調査は終了しましたと」

フィールドは二やりと笑い通信を切ろうとする。
が、相手は予期せぬ事を言い出した。

「は？ お前さっき“引き続き捜査をする”と言わなかったか？」
「いや、それは」

「お前誰だ！ コードと所属部隊を言え！！」

フィールドは何も言わずに無線機を足下に投げ捨てる。
そして、それを踏み壊した。

「付き合っていていられるか！」

フィールドはそうそうに立ち去ろうとする。
だが、突然周囲から大量の兵士が姿を現した。

「いたぞ！」

「フィールドだ！」

「反逆者を確認しました！」

たちまち周りを囲まれてしまった。

取り囲んだ兵士の中にはモンスターボールを持つ者までいる。

「生物司令部隊と攻撃部隊かッ！」

「殺れ！ イワーク！ バンギラス！！」

1人のPARUM生物司令兵がモンスターボールよりポケモンを召還する。

出て来たのはイワークとバンギラスであった。

「行けッ！ ノズパス！ エルレイド！！」

「お前達もだ カイリユー！ ガブリアス！！」

その他のPARUM生物司令兵達も次々とポケモンを召還する。
更にPARUM攻撃兵も銃を構えた。

「一斉射撃…… 貴様はッ！」

「!？」

突然、指揮を取っていた将校の近くで爆発が起こる。
数人のPARUM攻撃兵が吹き飛ぶ。

「…… “十万ボルト”」

第42話 お前は誰だ（前書き）

フィールド「お前は誰だ」

え？ 僕ですか？？

僕は“神”ですケド……

フィールド「精神科に連れて行ってやろうか？」

遠慮します スイマセンでした（汗

第42話 お前は誰だ

「どけッ！」

混乱を利用し脱出を計るフィールド。

隙についてP A R U Mの兵士達を切り倒す。

完全に不意を突かれたため次々と倒れていく。

「うわア！」

「ギャアッ！」

「ぐえッ！」

「ぐおッ！」

切り倒した兵士には目もくれずに進むフィールド。

慌ててフィールドを殺そうとするがもはや遅い。

フィールドを見る前に斬られていった。

「いかん 突破されるぞ！」

「増援を要請しろォ！」

もはや自分達では抑えれないと悟った。

増援を求める警報を鳴らした。

けたたましく警報が鳴り響く。

周囲から次々と兵士が集まってきた。

「カカカ〜♪ 奴がフィールドカ？」

1人の男が歩いて来る。

この男はかなりの長身であつた。

「カーコさん！」

「カカカカ…… 地デジ化に遅れちゃダメじゃないカ」

P A R U Mの精鋭騎士部隊カーコ。

今回の作戦には精鋭騎士部隊まで参加していた。

彼らはP A R U Mの最強部隊であつた。

「蚊が多いこの季節、蚊の退治には火が欠かせない
果たしてそうだろうカ？」

「邪魔だ “スパークソード” ！」

「ええッ！？ カーコさんの言葉無視！？」

カーコの言葉には全く動じないフィールド。

電気エネルギーを含んだ剣でカーコを斬ろうとする。

「火が欠かせないッ！ “火” ！」

「……………!!」

カーコは手から炎の球を飛ばす。

これはP A R U M兵器研究部隊が開発した最新の兵器によるものであった。

その名も“魔法発生装置”。

この装置を使う事によって凡人でも自由自在に魔法を使える。

「ウォータソード」!

フィールドは水を含む技で炎の球を消す。

因みにフィールドの剣にも魔法発生装置が仕込まれていた。

「電撃」! “クロスポイズン”! “冷凍ビーム”! “ハイドロポンプ”!!」

連続攻撃を下すカーコ。

しかし、フィールドは楽にかわしカーコに接近する。

「喰らえ! “サンダークロスソード”!!」

「ぎええッ!!!!」

「カーコさん!!」

その場に倒れるカーコ。
早くも戦闘不能に……

「十万ボルト……」

「ギャアッ！」

「ウゴオッ！」

突然の攻撃によって近くの兵士達が倒れる。
フィールドは攻撃の飛んで来た方を見る。

「ピカチュ……」

「ポケモンの存在を確認！」

「射殺せよ！ 抹殺するのだ！！」

空中に浮かぶ小型飛空艇・トルテクから兵士が降りて来る。
この兵士達も魔法発生装置を装着していた。
その為、高所にあるトルテクから飛び降りても無傷であった。

「PARUM魔物迎撃部隊かッ！」

「かれ！ 奴らを殺せ！！」

フィールドは後ろに向かって走る。
敵の数が多すぎる故、勝つのはほぼ不可能であった。

「“十万ボルト”！」

「グエエツ！！」

再び攻撃されるPARUMの兵士達。

フィールドは攻撃が飛んで来た方向に走る。

「ピカチュウ！」

「……………！」

そこにいたのはピカチュウ

フィールドの予想通りであった。

「ピカチュウ！ 無事だったのか！？」

だが、次に発せられた言葉は意外すぎた。
彼女の予想を越えた内容だった。

「お前は誰だ」

第43話 お前が死ねェ!!

お前は誰だ？

フィールドの頭に響くコトバ。

彼女はその場に立ち尽くしてしまう。

「私だ…… フィールドだ」

「フィールド？ ああ、そうか お前がフィールドか」

「オ、オイ、ピカチュウ？」

震える声。フィールドは思わず後ずさる。

一体ピカチュウに何が起きたのか？

……記憶喪失？

「ククク…… フィールドさん」

「……………!!? 記憶が戻ったか!？」

フィールドの表情は明るくなる。

彼女は記憶が戻ったのだと思った。

「ククク…… やはり頭はそうとう悪いらしい」

「……は？」

「たかがポケモンが生きているわけ……」

ピカチュウの体が紫色に光りだす。
フィールドは剣を取り出し構える。

「……ないだろオ!!」
「お前は……!」

紫色の光が消えた。
そこにはピカチュウの姿はなく、別の人物がいた。

「大暗黒帝!」
「ククク…… さて、メモリーカードを変えて貰おうか」
「ピカチュウはドコだ! ドコにやった!!」

フィールドは剣を握り締め怒鳴る。
完全に怒り狂っていた。

「……どうやら頭が壊れたらしい」
「お前さえいなければ、戦争は起きなかった!!」

剣で突き刺そうと走り出すフィールド。
大暗黒帝は動かずそれを見ていた。

「ヒコザルやピカチュウもお前が起こした戦争で死んだ！
いや、お前のせいで多くの市民やポケモンが死んだ！
今度はお前が死ねェ！！」

彼の心臓を突き刺す。

それで彼は死ぬ。

だけど上手くいくはずなかった。

大暗黒帝は彼女の剣を右手で握った。
自らの心臓に刺さる直前で。

「は、離せッ！ このッ！」

なんとか引き抜こうとするが全く動かない。

おまけに大暗黒帝の手からは一滴の血すら流れていない。

「……戦争は激化する このヨにも止められなくなる」

「ふざけんなッ！！」

「だが、神の力を持った者が戦争を止めるであろう」

大暗黒帝な剣を握ったまま言う。

一方のフィールドは必死に抜こうとするがビクともしない。

「それがお前だと言うのかッ！！」

「……少し違うな」

そう言うフィールドから剣を奪い取る。
その衝撃でふらついた彼女を殴り倒し、首に剣をつきつける。

「“我ら”が神となるのだ」

「わ、我らだと!？」

「……いい事を教えてやろう

この戦争は国際政府の真のトップと連合軍の真のトップによって
行われている

連合軍の真のトップはヨダがな」

「はッ!!?」

国際政府の真のトップはともかく連合軍と戦争しても利益はない。
もし、仮に連合軍を勝利させるならば国際政府首都グリードシテ
イに侵攻させている。

だが、現状は連合軍の支配は遠く及んでいない。
一体、真の国際政府トップとは誰なのか?
この戦争には何が隠されているのか?

「生き延びて真実を知るがよい!!」

「……………」

大暗黒帝は剣を捨てると空間に穴を開ける。
その中から白い小型の飛空艇が現れる。

「ではさらばだ！」

そう言うとき彼は消えた。

フィールドは倒れたまま。

しばらくして突然兵士が現れた。

「いたぞ！」

「奴を捕らえろ！」

我にかえったフィールドは慌てて飛空艇に乗り込み出発させる。

飛空艇は兵士達の攻撃にも壊れることなく飛び上がり、やがて空に消えていった。

第44話 空に舞うスカイ艦隊

【国際政府首都グリードシティ】

血のような色に染まる空。

軍用飛行場には100機のプローフィビ。

そこに入っていく大勢の人々。

国際政府軍やP A R U M軍の将兵だ。

その姿を軍用飛行場管理棟より見ている者達がいた。

「ダイレイ総帥 コレで連合軍を根絶やしにできますな」

「フフフ…… だろうな そして世界は平和を得るだろう」

国際政府の総帥グラン・ダイレイ。

元老院議長マグフェルトらであった。

「スカイ艦隊 出撃せよ！」

マグフェルトの号令と共に飛び立つプローフィビの大艦隊。

その先頭には旗艦（最高司令艦）デスパクト。

大型飛空艇プローフィビ100機から成るスカイ艦隊。

その兵力は百万人というとてもない数であった。

「この戦争が終わった時、世界は永遠の平和を手に入れる……」

次々と空に舞うプロファイビを見ながらダイレイは呟いた。
マグフェルトらはそれをただ見ていた。

世界を創造した神は植物や動物を造った。

植物と動物は食物連鎖の関係を造った。

植物と動物はお互いに繁栄と荒廃を繰り返した。

神はその関係を陰から見守り続けた。

でも、次第に飽きてしまった。

その内、人間は神の存在を否定。

神は見守る事に飽きた上、自分を否定された。

神はこう思った。

自分なんかなくてもいいだろう。

後は人間が何とかするだろう、と。

神はこの世界を捨て神の世界へと去った。

いや、去る前に自分の変わりを創造した。

その名は守護小神・アダムとイブ。

この世界に平和が続いた。

国際政府という名の巨大組織に守られて。

その裏ではアダムとイブが懸命に動いていた。

生物が増えないようにアダムは災害を起こし人口を抑制。

イブは政治を正しく行わせた。

でも、近年いくら災害を起こしても防災対策のせいで人口が減らない。

政治も腐敗した議員が増えて修正しきれない。

アダムとイブは相談した。

立て続けに起こる問題をどう解決すればいいか？

やがて、結論が出た。

神を呼び戻そう。

そして神の力で世界を治めるのだ、と。

『ポケモン不思議のダンジョン アホの探検隊 完結』

あとがき

約8ヶ月の時間をかけましたが遂に完結しました

最初はギャグ・コメディー中心でしたが中盤と後半はシリアスばかりになりましたね

ギャグ・コメディー好きの方には申し訳ありませんでした

さて、この小説には続きがあります

気づいている方もいらっしゃるかもしれませんがね

続編は自分の小説「最悪の世界大戦と世界の黒幕」です

もうすでに連載しています

気になった方は是非一度読んでみて下さい

さて、ここまで読んで下さった方々

コメントを下さった方々

心よりお礼申し上げます

有難う御座いました!!

【黑夜風の世界大戦シリーズ一覧】

◆星暦1945～2002年

「財閥連合／ダーククロニクルズ」…パトフォーと財閥連合の過去話【完結済み】

◆星暦2002年

「救世主を迎える門 バトルシティ」…フィールドの過去話【完結済み】

「守りたいモノ ――ラスト・テトラル―」…パトフォーとレス

トルの話【完結済み】

「逃げる旅」…ケイレイトとメタルメカの過去話【完結済み】

◆星暦2009年

「極秘任務遂行者」…グレンとシロナの話【完結済み】

◆星暦2010年

「オーロラ支部☆秘密の尋問」…パトラーの話【連載中】

「怪盗ポケット団 〽デンセツノヒホウ〽」…財閥連合社の崩壊【完結済み】

◆星暦2011年

「ニュー・スーパールイージ」…さらわれたピーチ姫を助け出す話【完結済み】

◆星暦2012年

世界大戦勃発！

◆星暦2013年

『ポケモン不思議のダンジョン アホの探検隊』…今作です【完結済み】

「七大神宝を巡る旅」…マリオの話【完結済み】

◆星暦2014年

「最悪の世界大戦と世界の黒幕」…ヒョールとフィールドの話【完結済み】

「僕とアノ人とのイケナイ関係」…サレファトとパトラーの話【連載中】

◆星暦2017年

「野望の終極——コワレタ英雄（仮）」…このシリーズの最終ス
トリー【未投稿】

それではこの小説を読んで下さって有難う御座いました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7703i/>

ポケモン不思議のダンジョン アホな探検隊

2011年7月17日00時47分発行